

タイトル	日本自動車産業と総力戦体制の形成（五）
著者	大場，四千男；OHBA, Yoshio
引用	開発論集(105)：59-96
発行日	2020-03-17

日本自動車産業と総力戦体制の形成（五）

大 場 四千男*

目 次

- 一章 ヒットラーとドイツの大衆車構想
 - 1 ドイツの「大衆車構想」VW 車開発
 - 2 ドイツ自動車工業
 - 3 ドイツ自動車業界の再編成
- 二章 日本の「大衆車構想」
 - 1 日産自動車構想 浅野源七
 - 2 軍部の大衆車構想とビッグ・スリーの抬頭
 - 3 国産車メーカーとビッグ・スリーとの競争
 - 4 商工省の大衆車構想
- 三章 満州事変と陸軍の自動車政策
 - 1 戦争の自動車動員令
 - 2 陸軍の自動車政策 —— 日露戦争
 - 3 陸軍の自動車政策 —— 第一次大戦と総力戦体制
 - 4 軍需工業動員法と軍用自動車構想
 - 5 陸軍整備局の自動車工業助成策 —— 中田佐一郎
 - 6 「軍用自動車補助法」と国産自動車産業の成立
 - 7 国産自動車メーカーの企業者群像
 - 8 関東大震災と輸入車黄金時代
 - 9 ビッグ・スリーの日本市場への参入
 - 10 日米合作運動と鮎川義介
- 四章 昭和期満州事変の自動車部隊編成と国産自動車の脆弱性
 - 1 日本 GM の販売・金融組織
 - 2 日本フォードの販売・金融組織
 - 3 自動車市場と国産自動車の衰退
 - 4 満州事変期陸軍省の自動車動員政策 —— 熱河作戦と伊藤久雄
 - 5 商工省の大衆車構想と岸信介、小金義照（第 101 号）
- 五章 商工省・鉄道省の自動車政策
 - 1 近代的輸送網への始動 —— 鉄道からトラック・バスへの転換
 - 2 大衆車時代の発達 —— 近代的都市と近代的交通機関の内的連結
 - 3 総力戦の方針と農商務省の資源調査政策
 - 4 総力戦の方針と商工省の設立 —— 米騒動の歴史的意義
 - 5 商工省の産業政策と総力戦の準備
 - 6 商工省の自動車政策 —— 標準型式自動車の製造
 - 7 満州事変の軍用自動車部隊と総力戦における自動車動員問題

*（おおば よしお）北海学園大学開発研究所特別研究員

- 8 標準型式自動車の共同生産と鉄道省の技術指導
- 9 鉄道省の自動車政策 —— 標準型式自動車の採用とバス事業の開始
- 10 ディーゼルエンジンの開発と輸送の大型化・高速化（第 102 号）
- 六章 総力戦体制の再編成と満州支配
 - 序
 - 1 後藤新平の満鉄総裁就任と国家経済主義
 - 2 対支 21ヵ条要求と国家経済主義
 - 3 西原借款と国家経済主義
 - 小括（第 103 号）
- 七章 第一次世界大戦の総力戦と日本陸軍の総力戦構想
 - 1 総力戦体制の起点と陸軍三人組
 - 2 小磯国昭の総力戦構想と「国防資源」論
 - 3 田中義一の総力戦構想と(甲)支那視察と日支親善外交の推進, (1)「対支経営私見」及び
(2)「日支製鉄事業の共同経営に就て」
 - 4 (一)寺内正毅の総力戦構想と朝鮮総督
(二)寺内正毅の支那借款と東亜総力戦体制
(三)寺内正毅の軍用自動車補助法と軍需工業動員法による総力戦体制の形成（第 104 号）
- 八章 軍用自動車補助法と軍用自動車の満州事変への動員
 - 1 満州事変から太平洋戦争への歴史的プロセス
 - 2 満州事変と関東軍自動車部隊の活躍
 - 3 満州事変における熱河作戦
 - 4 満州事変における河北境界方面作戦

八章 軍用自動車補助法と軍用自動車の満州事変への動員

1 満州事変から太平洋戦争への歴史的プロセス

(一) 岸信介の太平洋戦争観

岸信介は商工省の産業政策を立案するが、商工省における革新官僚として総力戦体制を構想し、推進するのに大きな役割を果たす。その端緒となったのは重要産業統制法であり、ドイツでの産業合理化政策を想定して日本的に再構想するのである。

次に、岸信介は重要産業統制法の中に国家経済主義を強く性格づける統制会による官民一体の戦時統制を立案し、重化学工業の総力戦体制への構築に成功して太平洋戦争への経済体制作りに全力を注いだ。一方、岸信介は商工局長として小金義照と共に自動車製造事業法を立案し、トヨタ、日産の生みの親となり、日本自動車産業を国防上及び産業上の理由から成立させるのに大きな役割を果たしたのである。

岸信介は他方、満州に関東軍から招かれ、満州産業五ヵ年計画を立案し、満州を日本帝国への生命線として総力戦体制の中に組み込み、太平洋戦争への経済基盤の確立に大きな役割を果たす。こうした産業政策を国家経済主義の中心に位置づけて総力戦体制を確立しようとすることから、革新官僚と位置づけられる岸信介は、太平洋戦争での勝負をどう見做していたのであろうか。

原彬久編『岸信介証言録』（毎日新聞社）の中で、岸信介は太平洋戦争を「日本自体死滅す

るしかないという気持ちだった」（44 頁）と次のように述べるのであった。

「ともかくもアメリカの資源および工業力のとてつもないスケールからいって、日本がこれと戦争するということは、国力の上から考えられないという気持ちでしたね。ただ先ほどいいましたように、日米戦争の開戦は、日本人が追い込まれていって、全面的にアメリカに屈服するか、あるいは日本自体死滅するしかないという気持ちだった。だからアメリカに対抗して、アメリカに勝ってアメリカに上陸しようとか、カリフォルニアをどうしようとか、そんなことを考える人は軍人でもいなかったはずだ。とにかく、アメリカがこっちに出て来るのを抑えておいて、日本が東南アジアにおけるインドネシアの石油を確保し、中国大陸および東南アジアの資源によって日本の生命をつないでいく、ということだったんです。」

岸信介は太平洋戦争で「日本自体死滅」と見做し、「中国大陸および東南アジアの資源によって日本の生命をつないでいく」のに過ぎないと考える。この「中国大陸」の資源とは満州国のことを指す。ここに岸信介の生涯の前半は満州産業五ヵ年計画で満州を産業立国に発達させた革新官僚としての自負が窺^{うかが}える。とするなら、満州国を成立させるのに大きな役割を果たしたのは、もう一人の革新軍人と見做される河本大作である。

（二）河本大作の帝国意識と下剋上の心情

大隈重信と加藤高明とが第一次世界大戦の勃発によって、日英同盟の絆から参戦して、中国の山東省を租借しているドイツに対して宣戦布告し、陸軍は青島を自動車部隊の動員によって占領し、他方海軍はドイツの占拠する太平洋の南洋諸島を陥落させてドイツ海軍に対して勝利する。前号で分析したように、ドイツへの勝利に対し大隈重信は対支 21 ヵ条要求を袁世凱に突きつけ、満州の関東州、山東省及び南洋諸島を帝国の領土として編入する。

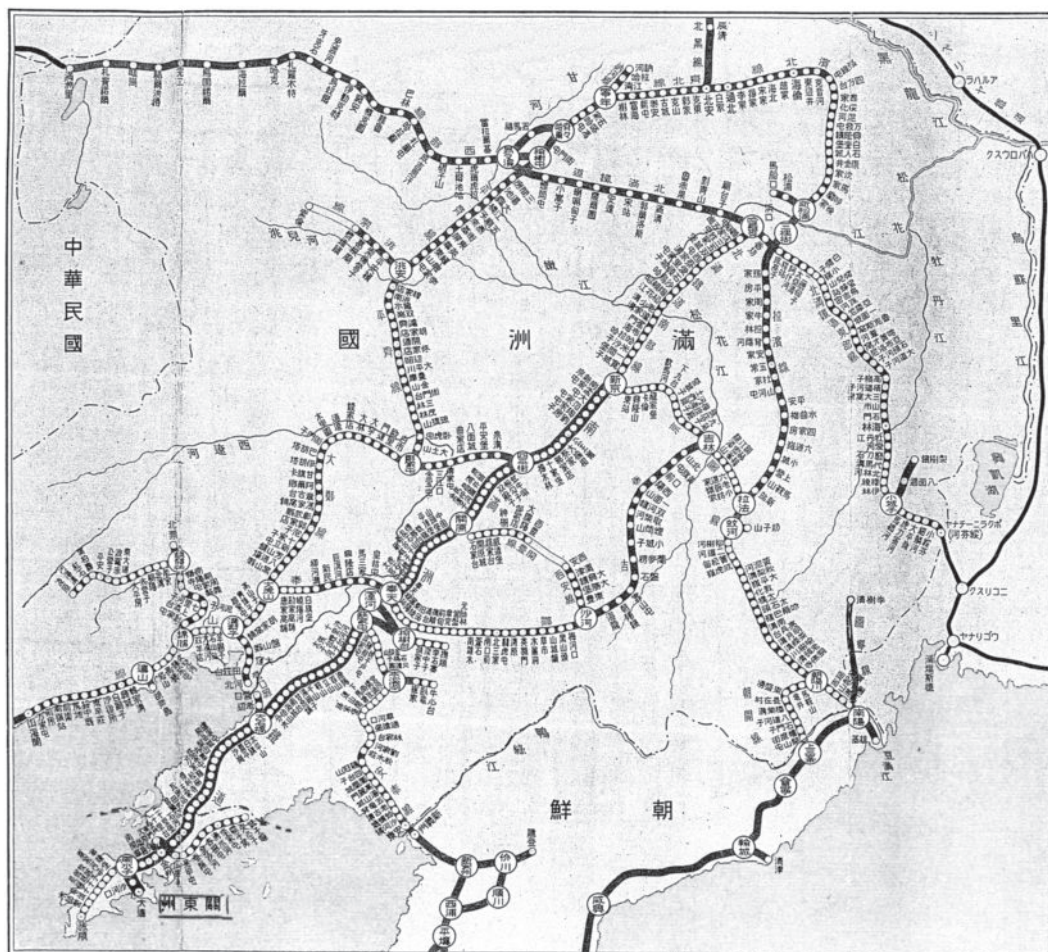
この関東州と南満州鉄道の周辺とは帝国への租借地として位置づけられ、さらに満州を帝国との特殊な利益関係で結ばれていることがベルサイユ条約で確認されるところとなる。とするなら、関東州と南満州鉄道（満鉄と以下略す）の周辺地とは中国の東北三省の中でどのくらいの位置を占めているのであろうか。次の図表 1 は関東省と満鉄沿線の大きさを示している。

この図表-1 から次の 3 点が導き出される。第一は関東州の規模、大きさである。関東州の地理的大きさは旅順から石河、さらに城子疃まで、3,462 平方キロメートルの面積を示し、満州全体から見ると 100 分の 2 から 3 ぐらいの規模である。なお、満州全体は 120～130 万平方キロメートル（1,306,900 平方キロメートル）で、日本の面積 37 万平方キロメートルの 3.5 倍である。

第二は満鉄の沿線は旅順から新京までの長さであり、満州の中央点に達する鉄道線で、約 770 キロメートルの小規模鉄道であるが、満鉄付属地 295 平方キロメートルを含むのである。

第三はこの満鉄沿線とその周辺は帝国の治外法権となっており、関東軍の国境警備隊によって守られている。したがって、関東軍は国境警備隊として配置され、5,000 人から 1 万人前後の兵士によって構成され、旅団規模の編成となっている。また、満鉄は沿線を含め、約 1 億坪を有し、坪 1 円の評価で資本金 2 億円のうち 1 億円を政府出資金とする半官半民会社として設

図表－1 満洲国及関東州、満州鉄路



立される。

関東州と満鉄が満州事変を契機にして東三省へ拡大し、満洲国へ発展させる原因となったのは河本大作による張作霖列車爆破事件を契機とするのである。この河本大作の列車爆破事件の背景となったのは田中義一内閣の東方会議に基づく対支強硬政策と蒋介石の革命外交との対立・衝突とに原因するのである。次に、東方会議の対支政策と蒋介石の外交革命との真逆関係が日支間の対立を新しい次元へ導くことになる。その原因は第一次世界大戦後の平和主義と不平等条約撤廃運動、海軍軍縮会議そして、移民排日運動の世界的広がりと共産主義運動の進展等である。さらに、第一次世界大戦の戦争特需の消滅による世界不況の進展は自由主義経済と金本位制を崩壊させ、保護貿易主義と管理通貨体制の導入とが世界経済を大きく転換させることとなる。とりわけ、ロシア革命の影響は支那に深く影響し、毛沢東の共産党結成と蒋介石の革命外交を新しく展開させ、とりわけ排日運動の質的転換を育くむのである。というのも孫文はロシアの援助を受け、清朝打倒に成功して三民主義を宣言するが、共産党の援助によって達

成されたのであり、国共合作の先駆となったからである。

こうした世界経済の変革と蒋介石の革命外交は、田中義一の対支政策の強硬化を余儀なくさせる。が、他方、幣原外交は対支対策として協調主義、共存共栄・不干渉主義を中心にする対支外交を推進することで蒋介石の外交革命と排日運動とによって対支 21カ条の廃棄、満州の支那への返還、帝国との特殊関係の否定等を国民運動として定着させる原因となった。それゆえ、張作霖爆死事件と満州事変とは第一次世界大戦後の新しい経済体制と革命外交の推進とを背景に生み出されるが、帝国の生命線である満州の支那への吸収が眼前に迫りつつあると感じた河本大作は満州を支配する北閥の支配者張作霖を爆死させる決意を実行に移さざるをえなくなった心情と苦悩について『文芸春秋』（32 巻第 18 号昭和 29 年 12 月号 194～201 頁）に「私が張作霖を殺した」の中で次のように綴っている。

「私が張作霖を殺した

満洲事変の先駆をなした張作霖爆死計画を遂行した張本人がこゝに初めて公開するその真相!!
 河 本 大 作

みんな日本人が悪いのだ

大正十五年三月、私は小倉聯隊附中佐から、黒田高級参謀の代りに関東軍に転出させられた。当時の関東軍司令官は白川義則大将であつたが、参謀長も河田明治少将から支那通の齋藤恒少将に代つた。

そこで、久しぶりに満洲に来て見ると、今更の如く一驚した。

張作霖が威を張ると同時に、一方、日支二十一ヶ条問題をめぐつて、排日は到る処に行はれ、全満に蔓つてゐる。日本人の居住、商租権などの既得権すら有名無実に等しい。在満邦人二十万の生命、財産は危殆に類してゐる。

満鉄に対しては、幾多の競争線を計画してこれを圧迫せんとする。日清、日露の役で将兵の血で購はれた満洲が、今や奉天軍閥の許に一切を蹂躪されんとしてゐるのであつた。

然るに、その張作霖の周囲に、軍事顧問の名で、取り巻いて恬然としてゐる者に、松井七夫中将を始め、町野武馬中佐などがあつて、在満同胞二十万が、日に日に蝕まれて行くのを冷然と眺めてゐるばかりか、『皆んな、日本人が悪いのだ』とさへ放言して顧みない。そして唯、張作霖の意を迎へるに専らである。

自分は、全く呆然とした。支那の各地を遍歴して可なり排日の空気の濃厚な地方も歩いたが、それにしても、満洲ほどのことはない。満人は、日本人と見ると、見縊り蔑んで、北支辺りの支那人の日本人に対する態度の方が遥かに厚い。正に顛倒である。日露戦役直後の満人の態度とまるで変つてゐる。

そこで、自分は、旅順にジツとしてゐることも許されず、変装して全満各地に状況を偵察する必要を痛感し、遠くチ、ハル、満洲里、東寧、ポクラニチア等、北満の南北に亘つて辺境の地を具さに観察したが、東寧辺りでは、街路上で、邦人が、満人から鞭たれるのを目撃し、チ、ハルでは、日本人の娘子群が、満人から極端に侮辱されてゐるのを見るなど、寔に切齒扼腕せざるを得なかつた。旅順に歸つてゐても、さうした情報が頻々として来る。奉天に近い新民府では白昼日本人が強盗に襲はれたが、而もその強盗たるや、正規の軍人であつた。邦人商戸は空屋同然となつて、日夜怯々として暮してゐると云ふのであつた。

自分自身、具さにその暴状を目撃して来たのである。日本人の軍事顧問や、奉天にある外交官が、『日本人が悪い』と断言するに足るものが、何処に発見されたか。

いづれも意識的、計画的に、奉天軍閥が邦人に対し明らかに圧迫せんとしてゐる意図は瞭然たるも

のがあつた。

而もその圧迫は、独りさうした暴虐に留らない、経済的にも、満鉄の線に対する包囲態勢、関税問題、英米資本の導入など、悉くが日本の経済施設、大陸資源開発に対しての邪魔立てである。撫順で出炭する石炭に対しては不買を強ひてゐる。これでは、日本の大陸経営は一切骨抜きとされてゐる。

郭松齡事件で、若しも日本からの、弾薬補給から、作戦的指導に到るまで、尠からぬ援助がなかつたら、奉天軍の今日の武威はなかつたのである。いはゞ大恩返しとして、商租権の如きは、奉天軍が進んで提供した權益である。

勢ひに乗つた張作霖は、ソロソロいつもの癖が出て、関外に出て、北京に入り、大元帥の称号を自ら宣して、多年の野望を遂げんとし得々としてゐた。その股肱、楊宇霆は又、日本の恩を忘れて、米国に媚態を見せて大借款を起さんとしてゐる。

其の忘恩的行動は枚挙にいとまがない。

武力解決決定す

翌けて昭和二年七月であつた。

田中義一は総理大臣兼外務大臣として台閣にあつたが、自ら主張して、所謂『東方会議』を開かんことを提唱した。外務政務次官に故森恪が居た。

当時関東軍司令官は、白川大將去つて、武藤信義中將が、大正十五年七月に代つて赴任してゐた。

武藤中將は、露西亞通で、嘗つて参謀本部第二部長も勤めて支那にも明るかつた。この支那通と云ふのも種々あつて、只支那に在住し支那人と交際し、骨董品位を貰つて、ホクホクしてゐるのを能とした類ひも尠くないが、武藤將軍はそんな支那通ではなかつた。

だから武藤將軍を関東軍司令官に迎へると、幕僚たる自分等の献策についても、これを能く諒解し、上下、腹藏なく大陸経営に対する、根本的対策の相談が出来たのであつた。

軀て東方会議が開かれることになつた。武藤司令官もそれに出席されることになり、自分もそれに随従して上京することになつた。

会議では、当然満洲に於ける対策が討議されねばならなかつたが、満鉄線に対する奉天軍閥がとつた、包囲態勢に対しては、最早や外交的な抗議等では及ばないことを自分は力説し、武藤將軍は、此会議に於て武力解決を強調された。田中首相もこれを諒とし、武力解決を是とすることに大体の方針が決められた。

そこで、自分は具体案として左の状勢を利することを献策した。その頃、支那南方に起つた蒋介石が、孫逸仙と共に北伐を開始し、奉天派はこれに対して、その先端は、浙江方面上海にまで進み、張學良と楊宇霆を首將として当らしめてゐた。

蒋介石の、予て軍官学校で養つた新鋭の兵は、奉天旧軍閥の兵とは、雲泥の相違で、軍紀等でもまるで違つてゐる。殊に揚子江以内には元來、南方派の勢力が根強く張つてゐる。張作霖は勢に乗じて、上海までも手を延ばしてゐるが、軀て蒋介石等の北伐が開始され、ば、忽ちにして奉天軍は又々奥の手の関内へ逃げ込みの一手を用ふるに相違ない。

蟹の穴に潜るのと同じで、一旦穴へ潜れば、容易に攻め難い。張作霖が敗退して関内へ帰れば、又々安泰である。こゝで機を見て、陽氣が温くなれば、のそのそ這ひ出すのである。

北京に出て、大元帥を誇号してゐる張作霖は、三十万の大兵を擁して今は関外にある。この三十万の兵が、ゾロゾロ敗れて関内へ流れ込んだら、又々どんな乱暴をやるか判らない。と云つて、これを助けたところで、一生恩に着るやうな節義はない。それは既に郭松齡事件で試験済みである。

その次に、南北相戦つて東支や山東の地を戦禍の中に曝らすのも亦幾多の權益を持つ日本を始め列国にとつても、亦無辜の支那民衆のためにも、看過すべからざることである。北伐も北支では阻止しなければならない。

同時に敗退した場合の張作霖の兵三十万は、宜しく山海関で悉く武装を解除してのみ、入れるべきである。そして武力のない、秩序、軍紀のない、自制のない、暴虐な手兵を持たぬ張作霖を相手に、失はれつゝある一切の、我が幾千件に亘る權益問題を一気に解決すべきである。

右の方策は、会議の容れるところとなり、殊に森恪は、この献策に非常な共鳴をした。そしてこれは東方会議の議決となつた。

張作霖を抹殺すれば足る

将して、蒋介石の北伐は開始された。始め蒋介石は、山東、北支の戦禍に巻き込まれることを避けよとの提案を容れてゐたに拘らず、勝ちに酔つて、遂に済南城內を通過せず、こゝに入城して約を違へたので、昭和三年の済南事変が勃発し、我が出兵となつた。一方奉天軍は、予想通りに敗走して、山海関へ雪崩れを打つて殺到した。

関東軍は直ちに、その治安維持のために備ふべく、朝鮮から一混成旅団を編成して、時を移さず奉天に集中して待機したが、錦州及び山海関へは、満鉄線附屬地以外へ出兵することになるので、奉勅命令を待たでは出動することが出来ない。其奉勅命令が一向下らない。敗兵は続々と入つて来ると云ふ有様であつた。

当時、田中首相は、内閣の総理であり、且つ東方会議の主催者であつたにも拘らず山海関の手筈は、東方会議の議決に依つて、不動の方針となつてゐるのに、何故か躊躇してゐる。

それは、時の出淵駐米大使からの報告に基いて、米国の輿論に気兼ねをし、既定の方針の敢行をためらつたのであつた。

又参謀本部第二部長は、松井石根中将であり、田中首相の側近のブレインとして、佐藤安之助少将などがあつて、それ等の意見に依つても動かされ、田中の肚はいよいよグラついたのであつた。

関東軍司令官は、その時、武藤將軍は村岡將軍と代つてゐたが、村岡將軍も、武藤將軍に比して、人格、識見共に譲らず、不動の大陸経営意見も全然軌を一にしてゐた。だから関東軍としては、現地に於てはすこしも動ずるところはなかつたのである。

然し肝心の中央部が恚んな有様だから、どうすることも出来ない。そのうちに、奉天城内には、呉俊陞が五万の兵を黒龍江省から率いて出て守備してゐる。そこへ、山海関からは毎日、一万、五千、と敗残兵が帰つて来る。五月下旬になると、敗兵が早や三四万は逃げ込んだ。京奉線から或は古北口の方から続々と入る。

関東軍は、万一のことがあれば、腹背に敵を受けねばならない。奉天はまだ好いとしても、全滿に彌漫した排日は、事あつた際は、燎原の火の如く燃え旺り、排日軍は一斉に蜂起するであらうことも予想しなければならない。又一度、奉天で我軍と、その敗残兵との間に干戈を交へんか、惧るべき市街戦となつて、奉天在住の日本人はどんな目に遭ふか判らない。既に排日は奉天城内では言語に絶し、邦人小学生の通学などは、危険で出来ないと云ふ状況、奉天在留の邦人達は、関東軍を唯一の頼みとしてゐたが、拱手傍觀の態度などで慥なからず失望すると云ふよりは、寧ろこれを怨んだ。

かゝる奉天軍の排日は、専ら張作霖等の意図に出た。ところで、真に民衆が日本を敵とすると云ふ底のものではない。唯、欧米に依存して日本の力を駆逐して、自己一個の軍閥の勢力の伸張を計り、私腹を肥やさんとするのみで、真に東洋永遠の平和を計ると云ふ風な信念に基いてゐないことは明らかであつた。一人の張作霖が倒れれば、あとの奉天派諸將と云はれるものは、バラバラになる。今日までは、張作霖一個に依つて、滿洲に君臨させれば、治安が保たれると信じたのが間違ひである。畢竟彼は一個の軍閥者流に過ぎず、眼中国家もなければ、民衆の福利もない。他の諸將に至つては、只親分乾分の關係に結ばれた私党の集合である。

殊に恚うした集合の常として、その巨頭さへ薙れゝば、彼等は直に四散し、再び第二の張作霖たるまでは、手も足も出ないやうな存在である。匪賊の巨頭と何等変ることがない。

巨頭を斃す。これ以外に満洲問題解決の鍵はないと観じた。一個の張作霖を抹殺すれば足るのである。

村岡將軍も、遂にこゝに到着した。では、張作霖を抹殺するには、何も在満の我が兵力を以てする必要はない。これを謀略に依つて行へば、左程困難なことでもない。

当の張作霖は、まだ北支でウロウロして、逃げ支度をしてゐる。我が北支派遣軍の手で、これを簡単に抹殺せしむれば足る——と考へられた。

竹下参謀が、その内命を受けて、密使として、北支へ赴く事になつた。

其れを察したので、自分は竹下参謀に、『つまらぬ事は止したが好い。万一仕損じた場合はどうする。北支方面に、恟うした大胆な謀略を敢行出来得ると信すべき人が、果してあるかどうか、甚だ心もとない。万一の場合、軍、国家に対して責任を持たしめず、一個人だけの責任で済ませるやうにしなければそれこそ虎視眈々の列国が、得たりと如何に突込むで来るか判らない。俺がやらう。それより外はない。君は北支へ行つたら、北京に直行して、張作霖の行動を詳さに偵察し、何月何日、汽車に乗つて関外へ逃れるか、それだけを的確に探知して、この俺に知らせてくれ』と云つた。北京には建川少将が大使館付武官として居つた。

周到なる爆破計画

竹下参謀から聴て、暗号電報が達した。張作霖がいよいよ関外へ逃れて、奉天へ帰ると云ふのであつた。その乗車の予定を知らせて来たのである。そこで、更に、山海関、錦州、新民府と、京奉線の要所に出した偵察者にも、其正確な通過地点を監視せしめて、的確に通過したか否かを、速報せしめる手筈をとつた。

扨て奉天では、何処の地点が好いか、種々研究した結果、巨流河にかゝつた鉄橋こそは絶好の地点であると決した。

そこで、某工兵中隊長をして、詳細に其附近の状況を偵察せしめると、奉天軍の警備は頗る嚴重である。尠くとも、一週間位はそこに待ち構へてゐなければならない。嚴重な奉天軍の警備の眼を逃れて、そんなことは到底不可能である。常に替玉を使つたり、影武者を使ふと云はれてゐる本尊を捉へるには、只一回だけのチャンスでは取り逃す憂ひがある。充分の手配が要る。

それにはこちらの監視が、比較的自由に行へる地点を撰ばねばならない。それには、満鉄線と、京奉線とがクロスしてゐる地点、煌古屯、こゝなれば満鉄線が下を通り、京奉線はその上を通過してゐるから、日本人が少々ウロ付いても目立たない。こゝに限ると結論を得た。

では、今度は如何なる手段に出るかが、次の問題となる。

一、列車を襲撃するか、

二、爆薬を用ひて列車を爆破するか、

手段はこの二途しかない。第一の方法に依れば、日本軍が襲撃したと云ふ証拠が歴然と残る。

第二の方法に依れば痕跡を残さずに敢行することが出来ないでもない。

そこで第二の方法を撰ぶことにした。そして、万一この爆破計画が、失敗に終つた場合は、直に第二段の手筈として、列車を脱線転覆せしめると云ふ計画をめぐらせた。そして時を移さずその混乱に乗じて、抜刀隊を踏込ませて、斬込む。

万端周到な用意は出来た。

第一報に依れば、六月一日に来る予定が来ない。二日も来ぬ、三日も来ぬ。漸く四日目になつて、確かに張作霖が乗つたとの情報が入つた。

クロス地点を通過するのは、午前六時頃である。予て用意の爆破装置を取付け、予備の装置も施した。第一が仕損じた場合、直に第二の爆破が続けられることにした。然し完全に其場で、本尊を抹殺するには、相当の爆薬量が要る。量を尠くすれば、仕損じる恐れがある。分量が多ければ効果は大きい、騒ぎが大きくなる。これには大分頭を悩ました。

それから一方、満鉄線の方である。万一この時間に、列車が来ては事だ。そこで予め満鉄に知らせ置いておけばいいが、絶対に最小限の当事者のみが当つてゐて秘密裡に敢行するのだから、それは出来ない。万一の場合のために、発電信号を装置して、満鉄線の危害は防止する用意をした。

来た。何も知らぬ張作霖一行の乗った列車はクロス点にさしかゝつた。

轟然たる爆音と共に、黒煙は二百米突も空へ舞ひ上つた。張作霖の骨も、この空に舞ひ上つたかとも思へたが、この凄まじい黒煙と爆音には我々が驚き、ヒヤヒヤした。葉が利き過ぎるとは全くこの事だ。

第二の脱線計画も、抜刀隊の斬込も今は不必要となつた。只万一、この爆破をこちらの計画と知つて、兵でも差向けて来た場合は、我が兵力に依らず、これを防ぐために、荒木五郎の組織してゐる、奉天軍中の『模範隊』を荒木が指揮してこれに当ることゝし、城内を堅めさせ、関東軍司令部のあつた東拓前の中央広場は軍の主力が警備してゐた。

そして万一、奉天軍が兵を起せば、張景恵が我方に内応して、奉天独立の軍を起して、其後の満洲事変が一気に起る手筈もあつたのだが、奉天派には賢明な臧式毅が居つて、血迷つた奉天軍の行動を阻止し、日本軍との衝突を未然に防いで終つた。

喪は発しないで、人心を鎮めるために、張作霖は重傷だが、生命に別状なしと発表して、城内は異常な沈黙のうちにあつた。そしてその当座、昨日に變つて、たとへ一時ではあつたが、さしもの排日行為も、ピタリと熄んで了つたのは笑止であつた。

愚直なる白川大将

張作霖の爆死後、張学良並に楊宇霆の一派は、奉天にある日本軍の意嚮を計り兼ねて、錦州方面に踏留まり、奉天に帰らうとせず、形勢を觀望してゐたので、奉天では、袁金鎧を首長として、東三省治安維持会を組織し臨時政權を形成してゐた。

而して日本側では、今後の東三省政權の首脳者には、誰を撰ぶべきかに就いて種々の意見が行はれ、奉天軍の軍事顧問であつた松井七夫少将一派は楊宇霆を推し、当時奉天特務機関にあつた秦真次少将の一派は張学良を推さんとし、その間に種々暗闘があつた。

然し、いづれにしても、このまゝ奉天を空にして、主権者なしで置くことは、統治上面白くないので、秦、松井の両者から、張学良に対し何等他意のないことを示して、速かに張、楊、両人の帰奉することを慫慂したので、漸く学良も安心して、密かに苦力に変装して奉天に歸つて来たのであつた。

丁度其頃のことであつた。前駐支那大使林樞助氏が奉天へ来て、まだ何となく落付かぬ氣持でゐる張学良に逢つた。

林樞助は学良に、日本外史中の関ヶ原戦後の豊臣、徳川の関係の一節を説いて、暗に学良を秀頼に、楊宇霆を家康に擬して、大いに学良を激励した。

大阪落城後の秀頼の運命と比べて、学良は家康たらんかも知れない楊宇霆に対して、何となく常に疑心暗鬼を感じたが、偶々、楊宇霆の誕生祝ひが催された。その盛宴に学良も列して見て、支那全省に亘る要人達からの山の如き、豪華な贈物を見るに及んで、天下の諸侯が既に、豊太閤歿後には、家康に靡いた有様を彷彿させるものがあつた。

学良の楊に対する猜疑は、こゝに於て愈々深く、楊に対して学良は窃かに害意を懐くやうになつた。

張作霖爆死の翌年四月、学良は、奉天督軍公署に楊宇霆を招いた。そして予て謀つて置き、衛兵長の某をして、其場に楊をピストルで射殺させて了つた。

これを知つて、予て学良擁立を考へてゐた秦少将、奉天軍に入つてゐた黄慕（荒木五郎）等は、すかさずこの機会を捉へて、張学良を主権者に推し、学良を親日に導かんと画策した。然し当時既に学良周囲の若い要人達は、欧米に心酔して、自由主義的立場にあつて、学良も亦是等の者をブレインとして重く用ひてゐたので、学良の恐日は、漸々と排日に變移し、遂には毎日とまで進んで行つた。

その現れは、満鉄線の包囲路線となり、万宝山事件となり、或は憑庸大学の排日教育となり、排日、抗日は、寧ろ張作霖時代よりも一層濃厚となり、日に日にその氣勢を高めるに至り、秦少将等の企図した学良懷柔策は全く画餅に帰したのであつた。

恁んな次第で、梟雄張作霖が亡んで学良と変つても、何等満洲の対日関係は好転せず、却つて反対の傾向をたどり、学良政権を再び武力に依つて倒壊しなければ、遂に満洲問題を永遠に解決する道のないことが瞭然となつた。

他方、日本の政界では満蒙問題解決に邁進する誠意を欠き、張作霖爆死事件をめぐつて、これに善処するどころか、却つてこれを倒閣の具に供さんとさへする一派が出て、中野正剛、伊澤修二等はそれに狂奔する有様であつた。

時の陸相白川義則大將は、徒らに愚直で、事件に対する答弁は拙劣を極め、益々中野、伊澤等に乘ずる隙を与へ、遂に田中内閣はこのため倒壊するに至つた。

さらに、この事件に参画した私は停職処分を受け、村岡軍司令官、齋藤参謀長、水町袈裟六独立守備隊司令官等も相踵いで、夫々行政処分を受けるに至つた。

政争は遂に国策を誤つて憚らない。政党政治の弊は茲に極まり、最も顕著な悪例を我が憲政史上に残したのはこの時であつた。

斯くて私は、昭和四年七月、一旦第九師団司令部附となり金澤に謫せられ、同年八月停職処分を受けて軍職を退くことになった。そこで旧伏見聯隊時代の縁故をたどつて、京都伏見深草願成に仮りの寓居を定め専ら謹慎の意を表した。

伏見に謫居する

この謹慎生活の裡にあつて、私は、熟々と沈思するの時を掴んだ。世は滔々として自由主義に傾き、彼等は、満蒙問題の武力的解決に対しては、批難攻撃を集注し、甚だしい論者中には、満蒙放棄論をさへ唱へ出す外交官を見るのであつた。

年々に増大する我が国の人口問題は如何、食糧に対する政策は？これ等から生ずる経済政策の根本的樹直しを必要とする時代ではないか。その当然の解決策として、大陸への確乎たる方策なくして何が出来よう。然し自分の執つた武力的方法は？果して世の批難攻撃を甘受すべきであらうか、猛省すべきならば敢然と省みよう。

私は自らを責め、自ら省み、深く時代を虚心、これをしつかりと把握するために、努力、研鑽した。京都帝大の権威と云はれる多くの学者達の門も叩いた。又連日に亘つて京都帝大図書館に通つてあらゆる政治経済の群書を広く涉獵したのであつた。

その結果は、日本の将来に直面してゐるものは、満蒙問題解決に外ならないことは、不動の事実であることに間違のないことを確かめた。新らしい構想の下に、飽くまでも満洲問題を解決すべきであるといふ鞏固な決意を深めるばかりであつた。

伏見の謫居は一年間であつた。その一年が過ぎると、一応、停職を解かれ第十六師団司令部附となり現役に復したが、その翌日附を以て予備役に編入された。従つて謹慎の生活も済んだので、居を東京に移すことゝした。

(元陸軍大佐)」

この河本大作論文は(1)張作霖爆死事件の背景、(2)その実行に到る計画案の作成に関係する関東軍、朝鮮派遣軍の連繫による武力行使のプロセス、(3)息子の張学良による排日、抗日運動の継続に対する次の満州事変への必然性、そして(4)河本大作を軍法会議で処分すると天皇に告げた首相田中義一への天皇の怒りと下剋上による軍閥の政治支配等を一挙に噴出する昭和動乱の始まりを明らかにする唯一の文献資料であると見做すことが出来る。かくて、その後、満州国

は河本大作の描いたプロセスに沿って満州事変の中から生み出され、さらに、熱河作戦から北支事変へ発展させて大東亜戦争へまた、太平洋戦争への道を歩むこととなる。ここに、岸信介の云う太平洋戦争が「日本自体死滅する」歴史のプロセスとなる。したがって、対支 21カ条要求の歴史的帰結は中国の伝統的戦略である「夷を以って夷を征す」こととなり、満州事変から日中戦争、さらに、太平洋戦争への連鎖を育くむことになる。河本大作論文はこうした帝国の歴史を歩む日本人の心情と下剋上の苦悩とを表わす政治と経済の一体化に基づく天皇制の歴史的必然性を背負うものの宿命的運命を告白しているのである。そして、この河本大作の延長線上に東条英機は「ハル・ノート」による満州からの撤兵要求を拒否し、満州の生命線の維持に固執することで太平洋戦争を決断するに至ることとなる。

2 満州事変と関東軍自動車部隊の活躍

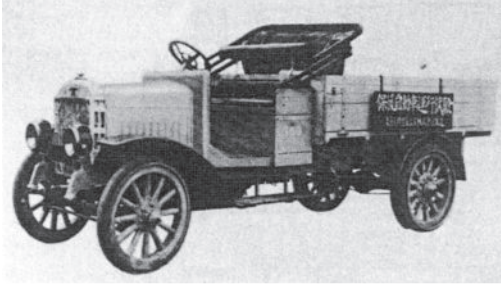
（一）満州事変に於ける自動車部隊の発足

満州事変は張作霖爆死事件後、東三省の支配者となった息子の張学良の奉天軍との戦争を歴史のプロセスとする。東三省とは熱河、吉林、黒龍江省のことを指す。関東軍はこの東三省を占領するため、満鉄の鉄道と東支鉄道とを利用し、さらに山岳地帯、砂漠地帯の鉄道の通らない所を自動車部隊を使用する、それゆえ、関東軍は、これまでの日清戦争、日露戦争、さらに第一次世界大戦と相違する鉄道と自動車部隊との連繋とで初めて張学良軍と戦争することを可能にされるのである。既に前章で述べたように寺内正毅内閣の大正7年1月に軍用自動車法を成立させ、日本独自の製造補助金の交付で国産軍用自動車が製造され、戦争の際に徴用することを義務づけていた。それゆえ、関東軍は、これら軍用自動車は、(1)東京石川島造船所自動車部のウーズレー号（後のスミダ）、(2)東京瓦斯電気工業株式会社の T・G・E 号（後のちよだ号）、(3)快心社（後の日産）のダット号の3種類を徴用し、軍用自動車部隊の編成を可能にされるのである。さらに、熱河作戦では戦車に加えて、ちよだ Q 型装甲自動車の導入となり、関東軍の機動性を発揮させ、総力戦の様相を呈し始める。これら4種類の軍用自動車の姿は次頁の図表-2によって窺うことができる。

満州事変は東三省の東西南北を戦場にすることから軍用鉄道の利用は(1)中央の満鉄による旅順からハルピン、さらに海倫へ、(2)蒙古とロシアとの間を走る東支鉄道、そして、(3)北京から奉天の鉄路である京奉鉄道の3鉄道を中心にするが、鉄道の無い所は自動車部隊による走破となる。関東軍は熱河作戦・河北国境地帯の作戦を最終戦として12ヶ所の戦場を鉄道・自動車の利用による機動作戦とで次々と張学良軍と蒋介石軍を撃破していくこととなる。したがって関東軍自動車部隊は陸軍自動車学校を母胎にして昭和6年11月に次頁の図表-3のように編成され、スミダ軍用自動車30台を中心とする部隊となる。

図表-3における関東軍野戦自動車隊は、(1)本部（隊長落合忠吉中佐）、(2)第一中隊（杉本祐一大尉）、第二中隊（吉田茂雄）、第三中隊（中宮勇大尉）そして材料廠（河根良賢少佐）等の将校下士官編成となる。

図表-2 軍用自動車とその製造会社



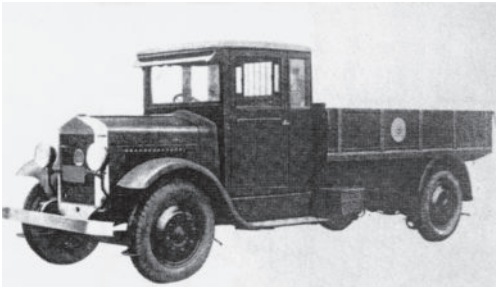
(石川島自動車)
軍用自動車補助法の資格試験に合格した当時の TGE
型トラック—大正 8 年

(吉原久氏提供)



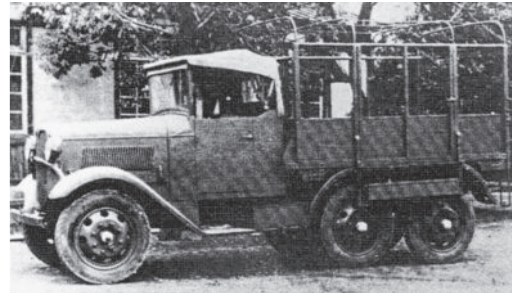
(東京瓦斯電気)
ウズレー CP 型軍用トラック
(大正 13 年軍用自動車補助法の資格試験に合格)

(吉原久氏提供)



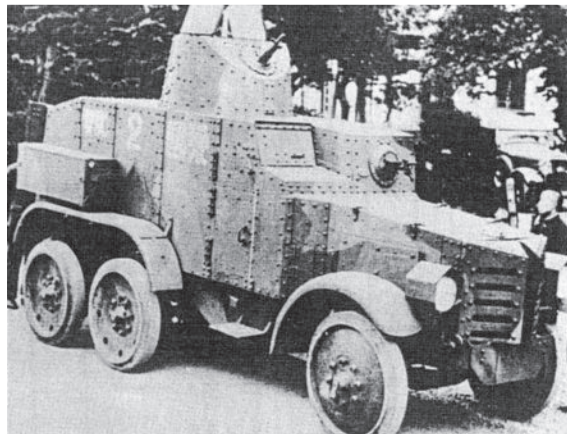
(石川島自動車)
スミダ L 型トラック
(昭和 4 年)

(吉原久氏提供)



(石川島自動車)
94 式六輪 (スミダ U 型) 自動貨車

(吉原久氏提供)



(東京瓦斯電気)
ちよだ Q 型装甲自動車

(松木熊吉氏提供)

図表－3 関東軍野戦自動車隊の編成 （注） 本表は当時の資料である。

関東軍野戦自動車隊第一中隊編成表（昭和七年十一月二十八日調大興安嶺作戦参加当時）					
中隊本部	小隊	分隊	車名番号	運転手	助手
中隊長 杉本 祐一大尉 須藤留五郎特曹 加藤 鉄松曹長 材料掛 的場 五郎軍曹 給養掛 三浦 孝蔵軍曹 （ハドソン一〇一号） 高柳 貞資上兵 藤田徳四郎一兵 （ハーレー一〇六号） 長島 芳雄上兵 （ハーレー一〇七号） 田中 嘉雄一兵 喇叭手 増丸 利夫一兵 （ハドソン一〇四号） 平井 潔上兵 羽田野今朝見一兵 島津益太郎一看 通訳 李 成華 〃 西川久仁平 炊夫 一名	第一小隊長 松木 熊吉中尉 （ハドソン一〇三号） 笠木 正一上兵 千原清太郎一兵	第一分隊長 山本 克巳軍曹	スミダー一一号 〃 一一二〃 〃 一一三〃 〃 一一四〃 〃 一一五〃	上兵 石川 千寿 一兵 吉久 正一 〃 妹川 茂 〃 永島 政直 〃 浪崎 明	一兵 藤原 太郎 一兵 宮本 太一 伍上 勝又 三郎
		第二分隊長 南部 守治軍曹	スミダー一六号 〃 一一七〃 〃 一一八〃 〃 一一九〃 〃 一二〇〃	一兵 川合 勇雄 〃 五十畑果三 〃 井上 好久 〃 坂本 角次 上兵 山田 甚一	一兵 藤本 辰治 〃 増田 英雄
		第三分隊長 石永 辰雄軍曹	スミダー二一号 〃 一二二〃 〃 一二三〃 〃 一二四〃 〃 一二五〃	伍上 前田弥一郎 一兵 木内美津男 上兵 窪田 清寿 〃 田中 健蔵 〃 平野 安孟	一兵 飯野 藤重 一兵 戸畑 鳳象 〃 長谷川政雄 〃 清水 茂
	第二小隊長 瀬戸 第一中尉 （ハドソン一〇二号） 板見 常一上兵 百鳥 由蔵一兵	第四分隊長 後藤 清軍曹	スミダー二六号 〃 一二七〃 〃 一二八〃 〃 一二九〃 〃 一三〇〃	一兵 厚木 新作 伍上 山中 茂 一兵 小松沢正一 一兵 一木 峯次 〃 野口 孝一	一兵 小野 徳治 一兵 太田 亀吉
		第五分隊長 佐々木美孝軍曹	スミダー三一号 〃 一三二〃 〃 一三三〃 〃 一三四〃 〃 一三五〃	伍上 川上 忠 一兵 竹花利三郎 一兵 小山 良一 〃 富田 政一 上兵 中石田益一	一兵 山本 央 〃 蔵田 敏夫 一兵 山口好四郎
		第六分隊長 大瀨西次郎軍曹	スミダー三六号 〃 一三七〃 〃 一三八〃 〃 一三九〃 〃 一四〇〃	一兵 長谷川寿男 〃 吉田 中一 上兵 斎藤 安一 一兵 松本 実 〃 岡田 俊雄	上兵 松永 久雄 一兵 原 勝三郎 〃 松本弥四郎 〃 住田 保
一六名、乗二、側二	六名、乗二	六名	貨三〇	三〇名	一八名

〔「自動車第一連隊史」 499 頁〕

（二）満州事変に於ける自動車部隊の参戦する 11ヶ所戦場の概括

①昭和 11 年 6 月昆々溪戦場

自動車部隊は奉天から大興まで鉄道輸送されるが、大興駅で下車して第二師団の馬占山攻撃に参加する。しかし、昆々溪附近に於ける戦闘では川野少佐が死亡した。

②法庫門討伐戦

自動車部隊は独立守備隊が実施した法庫門付近の匪賊討伐に参加した。ここでは討伐部隊の兵力輸送を実施する輜重兵の役割を果たした。

③錦州攻撃に参戦

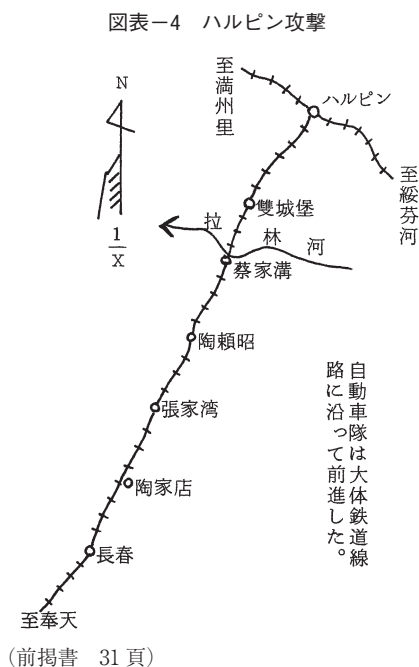
昭和 6 年 12 月から 7 年 1 月の戦闘で、張学良軍が関内から錦州に進出したので、関東軍は

全力を注いで錦州攻撃を決行した。この戦斗に第一，第二の自動車部隊（第一中隊の落合，第二中隊の北園両部隊）は12月29日から参戦し，第二十師団の下で戦闘部隊の兵力輸送に従事した。なお，錦州作戦には錦州城を砲撃するため大阪砲兵工廠で完成した新鋭十五耗加農砲を使用する計画だったが，ホルト牽引車の操縦者がいないために見送られた。昭和7年1月3日錦州を占領した。さらに，第一自動車中隊（落合）が附近の兵匪討伐に参加したが，第二自動車中隊（北園）は奉天に帰還した。

④7年2月のハルピン攻撃

関東軍の傀儡政権熙洽を打つべく張学良軍が攻撃を始めたのは7年1月27日からである。他方，熙洽の吉林軍を支援するため関東軍は第二師団を救援のため出陣を要請した。このため，関東軍自動車部隊の第一中隊，第二中隊に加え，徴用自動車隊（岩切部隊と中村部隊）が長春—ハルピン間の第二師団兵員輸送に全力を注いだ。この結果，関東軍と第二師団はハルピン南効において丁超軍を破り，2月5日ハルピン城に入り，日本人を救出した。

他方，吉林掃匪軍は突如ハルピンに近い雙城堡に現われた。これを迎え討つべく徴用自動車部隊（岩切大尉）に出動命令が出た。室井分隊（押収シボレー10台），広瀬分隊（乗合自動車10台，貨車（貨物トラック）4台）は次の図表-4の長春—雙城堡南に歩兵第二十九連隊を輸送した。



他方，徴用自動車部隊への出動命令は2月1日落合少佐によって長春駅で次のように下された。

日ハルピンを出発し、次の日の4日海林に到着し、5日に寧安を占領した。自動車部隊は北蘭少佐以下40名、乗用車2、貨車トラック11、側車1から成っているが、軍需品の輸送と匪賊の討伐を同時に行なった。

⑤-2 ハルピン附近の匪賊討伐への参戦

7年2月から3月にかけて自動車部隊第一中隊と第二中隊はハルピン近郊蘭五站付近及び東京城附近で匪賊討伐に参加した。

⑤-3 方正攻撃

この方正攻撃は7年3月22日反吉林軍を全滅させるべく、第二師団と歩兵第十五旅団（天野旅団）及び歩兵第三旅団（長谷部旅団）とが共に落合部隊と北蘭部隊、さらに徴用自動車部隊40両の自動車を加えた大部隊として出発し、前頁の図表-5の2ルートを進んだ。

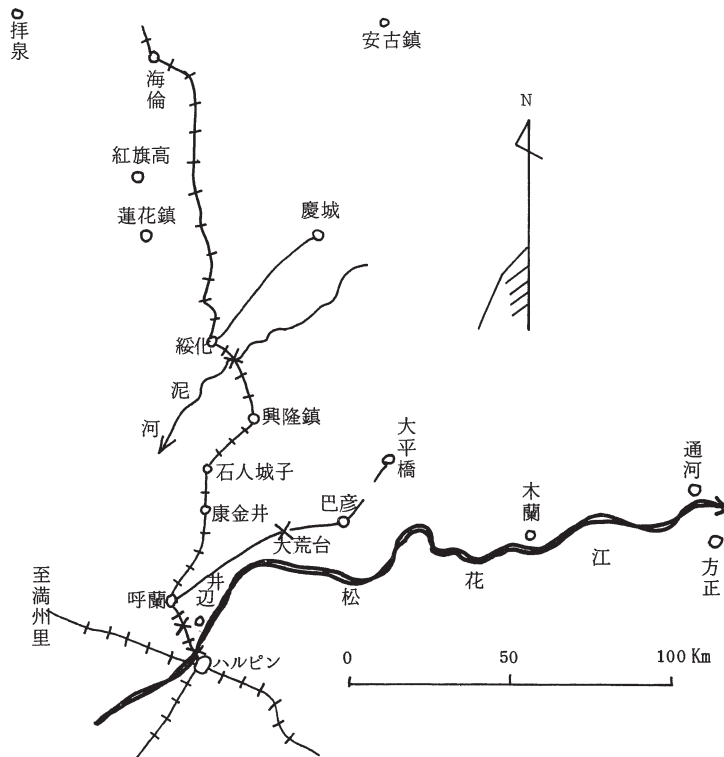
方正攻撃は2つのルートに分かれて進められた。第二師団及び歩兵第十五旅団と北蘭隊また徴用自動車部隊は鉄道線路に沿って烏吉密河から、同賓へ集合し、他方、歩兵第三旅団と落合隊は賓県から高麗帽、さらに同賓へ集合すべく進行した。自動車部隊は兵員と軍需品の輸送に従事し、輜重兵の役割を果たした。方正攻撃は吉林軍、関東軍と反吉林軍との戦闘で、激戦となった。4月10日から11日にかけてハルピンへの帰還命令に接し、4月12日落合隊は自動車を列車に積み、万徳号付近で、レールの犬釘引き抜きのため、脱線転覆して転落し、死者14名を出す万徳号列車遭難事件を引き起した。なお、負傷者は(1)自動車隊—重傷者10名、軽傷者19名、そして(2)歩兵隊—重傷者21名、軽傷者37名であった。

⑥-1 第一次馬占山攻撃（昭和7年5月～6月）

第十四師団は関東軍野戦第一・第二自動車部隊にハルピンへの集合を命じ、そこで隷下に置き、黒龍江省馬占山軍撃破のため5月23日に出発した。既に帰順していた馬占山が再び反旗をひるがえしたからである。進軍ルートは次の図表-6に示されているように、最初松花江を船で下り、井辺で上陸した。

井辺での上陸後、自動車部隊は呼蘭に進み、さらに綏化に前進し、ここで第一中隊（落合隊）は紅旗高方面へ軍需品の輸送を行った。他方、第二中隊（北蘭隊）は綏化—興隆鎮間において軍需品を運んだ。しかし、6月下旬、第十四師団がチチハル方面に転出したため、自動車部隊もチチハルへ転進した。

図表-6 黒龍江省馬占山攻撃



⑥-2 第二次馬占山攻撃（7年6月～7月）

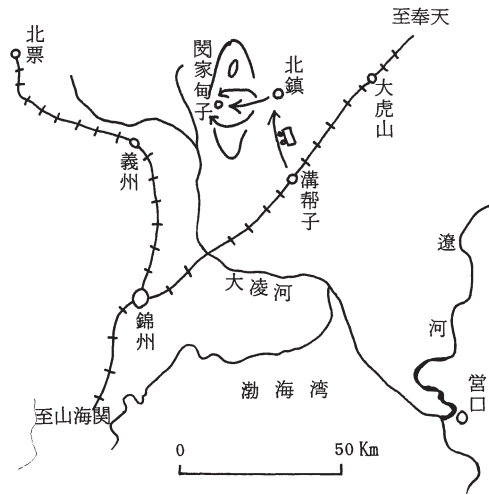
チチハル方面へ転進準備中だったが、6月下旬、第二中隊（北蘭隊）は呼海沿線への出動を命ぜられ、主力を綏化に、一部を呼蘭に、さらにもう一部を海倫に進出させた。第二中隊（北蘭隊）の主力は綏化から慶城への攻撃に参加した。第一中隊（落合隊）は呼蘭から巴彥への途中での大荒戸に於いて馬占山軍を撃破して大平橋へ進出し、馬占山捕捉に協力した。しかし、馬占山はソ連領内に逃走してしまった。かくて第一、第二中隊は共に奉天へ帰還した。なお、北蘭隊は四輪車を六輪車に換えての最初の出陣であった。

尚、7月4日に編成改正が行なわれ、関東軍第二野戦自動車隊は関東軍野戦自動車第二中隊に改編され、落合忠吉中佐が隊長に就任した。この改編によって、第一中隊長は杉本祐一大尉、第二中隊長は吉田茂雄大尉、そして、新しく編成される第三中隊は内地（東京目黒の輜重兵第一大隊）で立ち上げ、奉天へ派遣されることに決まった。隊長は中宮勇大尉である。

⑦関家甸子への攻撃—第三中隊の活躍

黒龍江省での馬占山攻撃に参戦した後、第三中隊自動車部隊は第八師団の指揮下に入り、錦州に向かい、次の図表-7に示される関家甸子の戦闘に参戦した。

図表－7 関家甸子付近の戦闘



(前掲書 51 頁)

この第三中隊が子関家甸子戦場で果した目ざましい戦果について次の賞詞を第八師団長西義一から与えられた。

「 賞 詞

長歩兵第十七連隊長 長 瀬 武 平

歩兵第十七連隊討伐隊

関東軍野戦自動車隊第三中隊ノ一小隊

右ハ抗日救国偽勇軍一千余、北鎮西方関家甸子ニ在リテ之カ討伐ニ向ヒシ北鎮警察隊カ却テ彼等ノ為ニ敗走セシメラレタルヲ知り直ニ之カ攻撃ヲ断行スルニ決シ十月一日夜半秘ニ自動車ヲ以テ溝帮子ヲ出發シ北鎮部隊ヲ併セテ先ツ兵力ヲ北鎮西南側ニ集結シタル後各々一部ヲ以テ北方頭道溝方面及南方柳樹屯方向ヨリ敵ノ両側背ニ迫リ其退路ヲ遮断セシメ主力ヲ以テ直接関家甸子ニ突進シ十月二日払暁一挙ニ之ヲ急襲シ数倍ノ敵ニ対シ勇猛善戦正ニ八時間余遂ニ之ヲ各所ニ包囲シテ殲滅的打撃ヲ与ヘ一部敗残ノ敵ヲ急追シテ之ヲ遠ク熱河省内ニ潰走セシメタリ。今其戦績ヲ見ルニ連隊長ノ攻撃計画竝其戦闘指導機宜ニ適シ各部隊亦独断専行最モ果敢ニ勇戦奮闘シ而モ克ク協同ノ実ヲ挙ケテ連隊戦闘ノ本質ヲ遺憾ナク發揮シテ以テ該方面ニ於ケル敵ノ策動ヲ挫折シ大ニ皇軍ノ威武ヲ宣揚セル功績偉大ナリ。

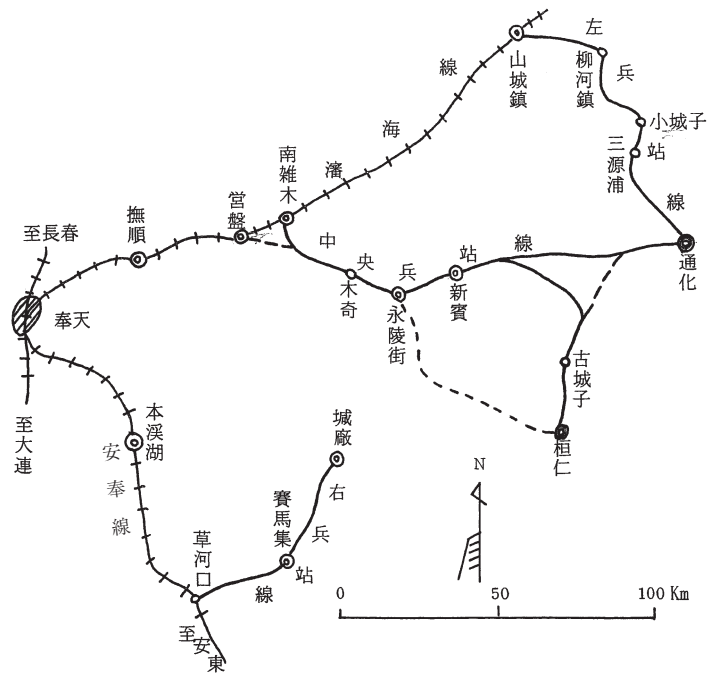
仍テ茲ニ之ヲ賞ス。

昭和七年十月三日

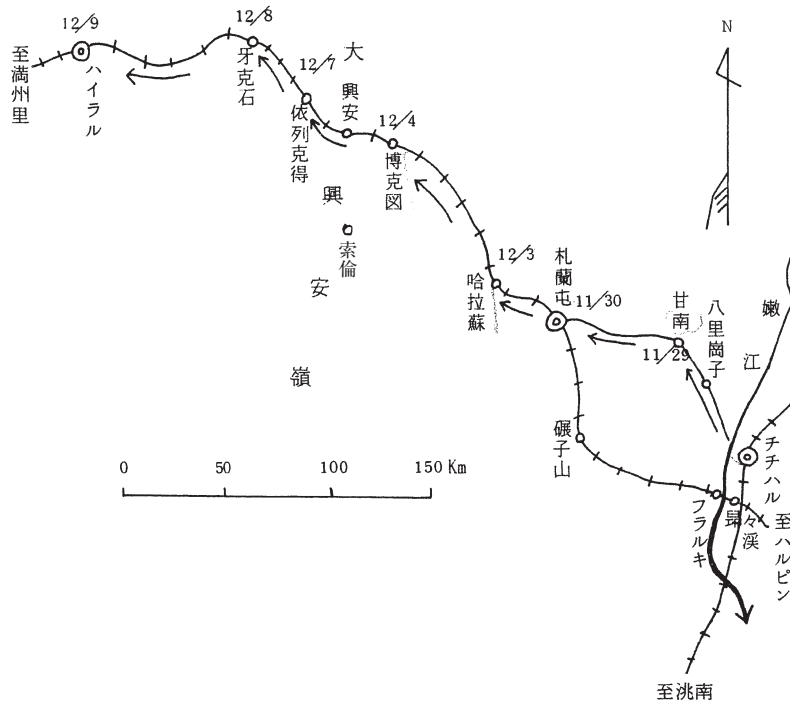
第八師団長 正四位 西 義 一
勲三等

この賞詞に強調されているように対匪戦で徹底的な殲滅戦を行った例は少ないが、その中で、第三中隊の活躍がきわだったのは包囲圏中での急襲を可能にした六輪自動車の威力に負うていたのであった。

図表-8 東辺道討伐兵站線



図表-9 大興安嶺作戦ルート



⑧東辺道兵匪討伐戦（昭和7年10月～11月）

関東軍野戦自動車隊（第一・第二中隊）は10月に混成第十四旅団、騎兵第一、及び第四旅団と共に、前頁の図表-8に示される通化、桓仁で兵匪討伐戦を行い、包囲殲滅させる命令を受け、出発した。

さらに図表-9から窺えるように、兵站線は(1)左兵站線（山城鎮—通化）、(2)中央兵站線（南雑木—通化）、(3)右兵站線（草河口—城廠）と3通りとなった。(1)の左兵站線は北園少佐の第一中隊、(2)中央兵站線は落合中佐の本部、そして、(3)の右兵站線は石井大尉の第二輸送監視隊（支那馬車編成）によって補給された。かくて、関東軍は10月10日から進軍し、敵を追って通化、新賓、桓仁へと前進した。そして、関東軍野戦自動車隊は軍需品の補給に全力を注ぎ、任務を果たし、10月末より11月初めに奉天へ帰還した。

⑨大興安嶺作戦—蘇炳文の国外追放

関東軍は和平交渉を無視し、その上昭和7年9月背反する蘇炳文軍を興安嶺以東の地で殲滅すべく大興安嶺作戦を実行するため、第十四師団、混成第十四旅団を派遣した。大興安嶺作戦は前頁の図表-9によって窺える。

この大興安嶺作戦に参加した自動車部隊は100輦近い自動車大部隊で、次の編成となった。

関東軍野戦自動車隊本部

隊長 落合中佐、副官 岩切大尉

隊付 徳沢大尉以下二〇名、乗三、側一、貨二

材料廠

廠長 河根少佐

廠付 前野大尉以下二五名、乗一、貨四

第一中隊（人員七〇名、乗四、側二、貨三〇）

中隊長 杉本大尉

第一小隊長 松木中尉 } 両小隊共三分隊

第二小隊長 瀬古中尉 } 分隊はスミダ貨車五

第三中隊（人員七一名、乗一、側一、貨二七）

中隊長 中宮大尉

第一小隊長 今坂中尉（三分隊、貨車一五）

第二小隊長 昆野中尉（二分隊と行李分隊、貨車一二）

混成第十四旅団自動車班

班長 桜井幸衛大尉以下三九名、側二、貨一一

（前掲書 57-58 頁）

混成第十四旅団自動車班が関東軍自動車隊に加わるが、途中八里崗子、さらに甘南で敵軍を撃退し、また、碾子山、札蘭屯で敵を急襲して潰走させた。宮本大隊は鉄道により興安嶺に向かって追撃した。松野尾大隊を乗せた自動車隊は哈拉蘇へ、さらに博克図へ追撃前進し、依力克図に、12月8日夜に免渡河へ、そして12月9日ハイラルに進入した。ハイラルに居た蘇炳文と敵兵1,500名さらに満州里の敵兵500名は共に、ソ連領へ逃げ込んだ。ここに大興安嶺作

戦は成功裡に終わった。12月6日自動車隊と鉄道追撃隊は満州里に捕われている邦人約200名を救出した。

⑩索倫支隊支援策

索倫支隊とは関東軍直轄部隊で三宅中佐を隊長とする騎兵第八連隊のことで、洮安とハロンアルシャン（温泉方面）の中間にある索倫において警護と兵匪討伐に従事していたが、⑨で述べた大興安嶺作戦を補完する命令を受け、次の索倫支隊野戦自動車部隊（中心は第二中隊）を隷下に置き、⑩の作戦に次の編成で望んだ。

本部

隊長 北蘭少佐

隊付 山崎大尉以下八名、乗一

第二中隊（人員六七名、乗三、側一、貨二六）

中隊長 吉田大尉

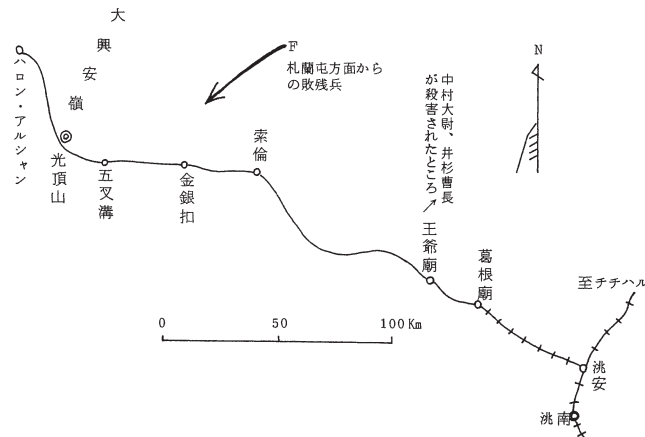
小隊長 西川中尉、城戸中尉

修理班

班長 甲斐大尉以下人員一四名、乗一、貨二

12月1日から第二中隊は葛根廟—索倫間の軍需品輸送に従事した。又、一部の自動車隊はハロンアルシャン方面への偵察と蒙古軍の軍需品輸送に当たったが、輸送ルートは次の図表-10に示されているところである。

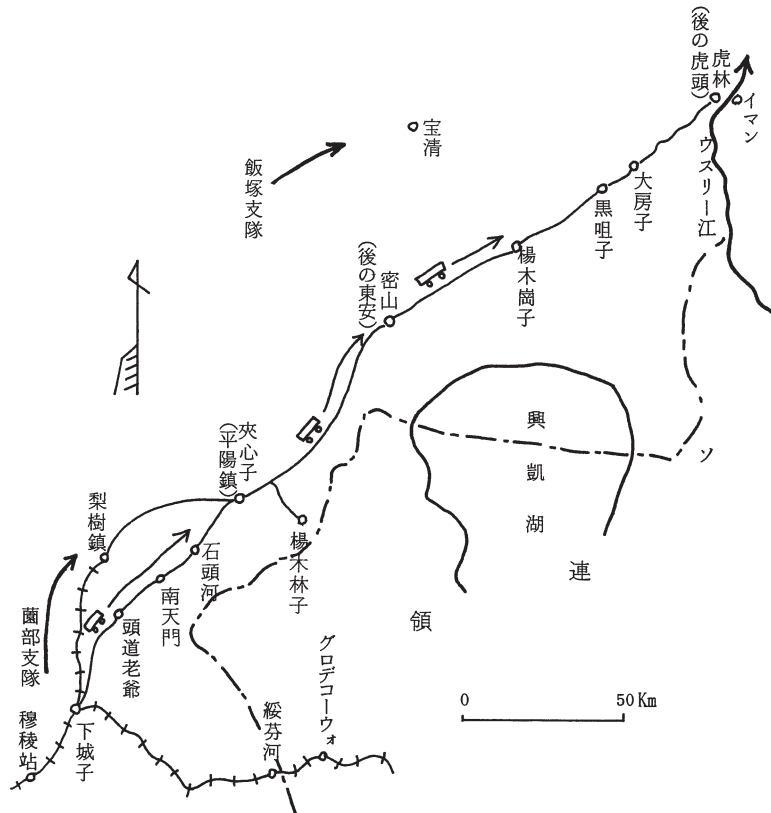
図表-10 索倫支隊野戦自動車隊輸送ルート



第二中隊は偵察を興安嶺の南麓に向けて続行中に、敵兵100名程の一团とぶつかったが、中央突破をして、難を逃れた。

一方、興安嶺作戦中、地形調査に出た一部自動車隊の中村大尉と井杉曹長は葛根廟の西北方王爺廟付近で兵匪の襲撃にあって殺害される不運に見廻われた。

図表-11 吉林省東境方面作戦ルート



(前掲書 64 頁)

⑪吉林省東境方面作戦（7 年 12 月—8 年 1 月）

作戦は吉林省東境に依拠して兵匪集団となって暗躍する李杜、丁超、王徳林等を根絶することを目標にした。関東軍は第十師団を主力に大黒河討伐の命令を下した。その隷下に入った関東軍野戦自動車隊は 8 年 1 月 2 日列車に乗り、下城子に 1 月 3 日に到着した。自動車部隊は密山部隊を乗せ、下城子→夾心子へ向かった。そこで穆稜鉄道方面の蘭部第二中隊と合流した自動車部隊は密山を占領するよう命ぜられた。なお、吉林省東境方面作戦ルートは上の図表-11 に示される。

この吉林省東境方面作戦に動員された自動部隊は第一、第二、第三中隊を中心に行っているが、299 名と自動車 76 台の次のような編成である。

本部（人員二三名）

隊長 落合中佐、副官 岩切大尉

隊付 友沢英一少佐（25 期）、徳沢大尉、山崎大尉、島主計、渡辺軍医

材料廠（人員四〇名）

廠長 河根少佐

廠付 杉本大尉、清水繁蔵特務曹長、竹下米蔵上等工長

第一中隊（人員七八名）

中隊長 甲斐大尉

中隊付 瀬古中尉，松木中尉，須藤特務曹長

第二中隊（人員七五名）

中隊長 吉田大尉

中隊付 西川中尉，城戸中尉，安達賢一特務曹長

第三中隊（人員七八名）

中隊長 中宮中尉

中隊付 今坂中尉，昆野中尉

以上計 二九九名

さて、当日の行軍序列は、尖兵，前兵，前衛本隊，本隊の順で，これに対する支隊配当自動車は次の通りであった。

第一中隊一歩兵一九（一五人乗），山砲四，工兵二

第二中隊一歩兵二五（一五人乗）

第三中隊一歩兵二二（一二人乗），糧秣三

別に支隊に対し，乗用車三，機関銃搭載用側車二，伝令用側車一が配当された。

密山城には兵匪 400～500 名が占領し，軍の前進を阻止すべく立ちふさがっていた。自動車隊も兵士も全てが砲兵火力をもって兵匪を撃滅した。最後に，敵兵は白旗で降伏を申し出たので，密山に入城することができた。さらに，自動車部隊は追撃戦を続け，虎林に迫った。自動車部隊は歩兵第十聯隊を乗せ，密山支隊となり，ついに 1 月 4 日虎林を占領して李杜を国外に追放し，作戦の目的を果たした。一方，第十師団は兵力を虎林黒咀子密山に伏せ，丁超を捕捉しようとした。が，すでに丁超は，桂山斯方面より前進する飯塚支隊に降伏を申し出ている。他方，帰途の際に，自動車部隊は揚木崗子附近で劉万魁を捕捉して国外へ追放した。吉林省東境方面作戦を遂行して，奉天に帰還した自動車部隊は，次の満州事変の最終戦である熱河作戦と河北国境方面作戦に対して準備に追われた。

3 満州事変における熱河作戦

（一）関東軍自動車部隊の追加編成と車両の多様性

東三省のうち，関東軍が鉄道と自動車との組み合わせで，吉林省，黒龍江省を占領し，統治したことは，前述した 11 ヲ所の主要戦場で見てきたところである。残されているのは北京に隣合わせする熱河省である。しかも，熱河省は面積が満州の中でも大きく，砂漠と湿地帯と山岳地帯という自然条件を抱えている。鉄道は海岸線に沿った京奉鉄道の一本にしか過ぎない。このため，熱河省を攻略するためにはどうしても自動車，戦車，装甲自動車，六輪自動車等を総動員しなければ，短期間で戦争に勝利することは^{おぼ}覺つかない。こうした，熱河省の地理的特異性と自然条件，さらに短期戦等の特殊条件を考慮した上で，関東軍は総力戦の中心に機動性の富む兵器として自動車の迅速性，快速性そして頑強性に富む自動車部隊の大幅な増強に踏み切り，とりあえず第一次として従来の 3 コ中隊に第一次 4 コ中隊（4—7）の増設を昭和 8 年 2 月 15 日にその編成を完了した。次に第二次 4 コ中隊（8—11）の増設も 3 月下旬に編成

を終了した。そして、第三次2コ中隊(12—13)の増設は4月下旬に組織された。以上のよう
に、中隊が13中隊に増設されたが、その主要幹部と採用された自動車の種類を概括すると
以下のような編成となる。

自動車隊長—落合忠吉中佐(23期)

副官—岩切義一大尉(26期)、後に山崎常二大尉(少2期)

隊付—新庄淳少佐(25期)、友沢英一少佐(25期)、徳沢軍鉞大尉(27期)、大谷政平中尉(36期)

第一中隊—長 甲斐隆之助大尉(29期)

小隊長—瀬古第一中尉(35期)、松木熊吉中尉(36期)

中隊付—須藤留五郎特務曹長

隊員は四年兵、車両はスミダ

第二中隊—長 吉田茂雄大尉(31期)

小隊長—西川庚造中尉(35期)、城戸 正中尉(38期)

隊員は四年兵、車両は「ちよだ」

第三中隊—長 中宮 勇大尉(30期)

小隊長—今坂新也中尉(35期)、昆野英雄中尉(少7期)、藤本見習士官

隊員は三年兵、車両は「ちよだ」、ウーズレー

第四中隊—長 山崎常二大尉(少2期)、後に日野純一大尉(27期)

小隊長—山本佐一、安達賢市特務曹長

隊員は二年兵、車両はシボレー

第五中隊—長 石原健一大尉(33期)

小隊長—丸山正寅中尉(38期)、川瀬少尉、館 貞治特務曹長

隊員は傭人、車両はダット

第六中隊—長 中村卯之助大尉(26期)、後に服部一大尉(34期)

小隊長—堺 甚蔵特務曹長、岸田善夫曹長

隊員は二年兵、車両はフォード新車

第七中隊—長 中西次八中尉(35期)

小隊長—木南保太郎、谷富一男、福田春治特務曹長

隊員は二年兵、車両はシボレー

第八中隊—長 師富重俊大尉(31期)

小隊長—新免祐一中尉(少11期)、橋本喜義曹長

隊員は初年兵、車両はウーズレーの中古車

第九中隊—長 北原利則大尉(33期)

小隊長—田悟直治中尉(38期)、田中曹長

隊員は初年兵、車両は各種中古車

第十中隊—長 会田栄次郎大尉(29期)

小隊長—山田少尉、野村少尉

隊員は傭人、車両は？

第十一中隊—長 瀬戸末男大尉(34期)

小隊長—緒方 泉中尉(37期)、川添特務曹長

隊員は二年兵、車両はウーズレーの中古車

第十二中隊—長 武居卯一大尉(30期)

中隊付—門平少尉、長坂少尉、川上少尉

隊員は傭人、車両は？

第十三中隊—長 上条貞則大尉（33 期）

小隊長—太田少尉，森田少尉

隊員は傭人、車両は？

材料廠—長 河根良賢少佐（23 期），後に中村卯之助少佐

廠付—杉本祐一大尉（33 期），前野重弘大尉（34 期），定吉少尉，清水特務曹長

（前掲書 69 頁）

ちなみに、自動車の種類について見てみると、これまでの自動車がスミダで統一されていた（第一，第二中隊）が，この昭和 8 年段階では，アメリカのフォード，シボレーも加わってかなり多様化されていることが次のように窺える。

第一中隊—車両スミダ

第二中隊— ク ちよだ

第三中隊— ク ちよだ，ウーズレー

第四中隊— ク シボレー

第五中隊— ク ダット

第六中隊— ク フォード新車

第七中隊— ク シボレー

第八中隊— ク ウーズレーの中古車

第九中隊— ク 各種中古車

第十中隊— ク ？

第十一中隊— ク ウーズレーの中古車

第十二中隊— ク ？

第十三中隊— ク ？

車両が不明なのは 4 コ中隊であるが，残り 9 コ中隊は車両を(a)スミダ(1)，(b)ちよだ(2)，(c)ウーズレー(3)，(d)ダット(1)，(e)フォード(1)，そして，(f)シボレー(1)等となっている。この車両分類から窺えることは次の 2 点である。

第一は軍用自動車の製造メーカーがスミダの石川島自動車部からちよだの東京瓦斯電気とダットの快心社（日産）へ移り，三社体制の基礎を軍用自動車補助法によって支えられている点である。また，満州事変でのこれら軍用自動車の性能が絶えず点検され，改善されることが要求されていた。つまり，戦争に適応するように改善，改良されることが求められていたのである。戦地に適応するように自動車の型式，性能，自動車の馬力，大きさ等が検討され，この結果，陸軍省は後述するように，絶えず軍用自動車補助法の改正を 2～3 年毎に実施することになった。この点で，満州事変は軍用自動車の改善を通して軍用自動車の性能向上に大きな役割を果たし，次世代の軍用自動車の「いすゞ」（いすゞ自動車株式会社）及び日野自動車を生み出す背景となった。なお，この軍用自動車補助法の改正は次稿で検討される。

第二は追加中隊の中で新しくアメリカのフォードとシボレー車が採用され，国産自動車と対

比されることとなった。フォードとシボレーは日本で KD 生産で完成車にされるが、両車とも日本では大衆車として位置づけられ、3,500 cc の排気量を有し、馬力と性能の高さで国産自動車を圧倒した。このため、日本の自動車市場では両車が 90% を占める独占的市場占有率を誇っていた。さらに、熱河作戦での軍用自動車とフォード、シボレーとの性能と馬力の相違は大きく、とりわけ湿地帯での泥の中にタイヤの半分以上埋まった場合、ほとんどの国産軍用自動車は脱出することが出来ず、兵士の人海戦術でようやく引き上げられる状態であった。これに対し、シボレー、フォードは湿地帯、また、砂漠地帯でもその馬力の大きさと高性能とによってかろうじて自力で脱出することができたのであった。

こうした満州事変での国産軍用車とシボレー、フォードとの性能格差は陸軍の自動車政策に影響し、一方はフォード、シボレーの大衆車を日本の国産自動車の型式に採用すべしと主張する。他方の人は国産軍用自動車の大型車（いすゞ）を採用し、満州において使用すべきと主張し、前者と対立した。したがって、満州事変後の普通自動車の標準型を決定する決め手となったのは満州事変でのシボレー、フォードの優秀さにあった。それゆえ、昭和 11 年 5 月に制定される自動車製造事業法は、フォード、シボレークラスを普通自動車の型式として採用することになったが、その決定に大きな役割を果たしたのはこの満州事変での自動車部隊に由る戦争体験に基づくものであった。これまでの日本自動車研究史はこうした満州事変での自動車部隊における国産軍用自動車とシボレー、フォードとの経験の実証分析を欠落させ、単に日本市場でフォード、シボレーに対抗する国産車構想からトヨタ車、日産車の導入を導き出している。こうした従来の自動車史研究は、満州事変での外国車部隊と日本車部隊の経験と実証とが陸軍の自動車政策をフォード、シボレーへ指向させ、日産車、トヨタ車への標準型式を決める要因になっていった歴史プロセスを看過している。この欠落は日本自動車研究史に見られる一般的現象であると言えよう。

（二）熱河省南部方面作戦―第八師団と主力自動車隊

熱河省南部方面作戦は次の図表-12 に示される錦州―義州―朝陽寺―北票の鉄道線に沿って行われた。その目的は熱河省の省都承德を占領することである。



川原挺進隊は中央方面の平泉に突撃した。一方自動車隊主力は2月20日鉄道輸送によって義州に集合し始めた。3月1日に自動車隊主力（第一、第三、第六）は川原挺進隊の隷下に入り、自動車数百両で、葉柏樹—凌源—平泉—承德道を経て熱河省の省都承德に突入した。他方、川原挺進隊は葉柏樹で3,000の敵軍を破り、翌2日に凌源付近で兵匪を撃破して平泉へ、さらに3月3日六溝へ達し、次の4日には首都承德を落とした。第八師団長西義一はこの熱河省の首都承德を占領した功績に対して川原挺進隊に「勝ッテ兜ノ緒ヲ締メヨ」と次の訓示を与えた。

承德入城ニ当リ挺進隊將兵一同ニ告ク

諸士ハ三月一日早曉朝陽ヲ出發シ天嶮ヲ利用シ到ル処執拗ニ抵抗スル敵ヲ悉ク突破シ嶮峻ヲ攀チ酷寒ト闘ヒ昼夜ヲ分タス奮戦力闘シ疾風枯葉ヲ捲クノ勢ヲ以テ百里ノ行程ヲ僅カニ四日直路忽チニシテ熱河ノ心臓タル承德ヲ衝キ須臾ニシテ大勢ヲ決スルニ至レリ

其ノ赫々タル偉勲ハ真ニ空前ニシテ其燦然タル武功ハ永ニ戦史ヲ飾ラン

斯ノ如キハ畏クモ上大元帥陛下ノ御稜威ノ下銃後九千万同胞至誠後援ノ賜ナリト雖モ隊長以下將兵一同連日連夜全ク不眠不休真ニ死生ヲ超越シタル献身の奮闘ノ結果タラスンハアラス

殊ニ本作戦間隊長ヲ中心トシ克ク和衷協力ノ実ヲ挙げ進ンテ難局ニ当リ然モ功ヲ讓ツテ誇ラス先ツ他ヲ推賞スルノ美德ニ至ツテハ是実ニ皇軍ノ精華武士道ノ真髓ニシテ本職ノ感激措ク能ハサル処ナリ

本職今茲ニ諸士ニ訓示スルニ当リ真ニ謝スルニ其ノ辞ヲ求ムルニ苦シム唯衷心ヨリ其勞ヲ多トスルト共ニ此間戦没セル崇高ナル犠牲者ニ対シテハ深く哀悼ノ意ヲ表スルモノナリ

思フニ熱河攻略ハ赫々タル武勲ヲ残シテ其大勢既ニ決シタルニ似タリ然レトモ近ク平津ノ地ニ敗走シタル敵ハ再起ノ勢ナシト雖モ長城万里ノ墻壁ヲ確保シテ満州国擾乱ノ禍根ヲ絶ツハ是レ吾人ノ直前ニ横ハレル重任タリ

又所在ニ潜伏シテ将来兵匪化スヘキ敗残十数万ノ敵ヲ徹底的ニ掃蕩シ以テ熱河省ヲシテ速ニ安住ノ樂土タラシムルコト亦至難ノ任タリ

本職諸士ノ努力ニ報スルニ更ニ一段ノ奮勵ヲ要望スルハ情ニ於テ忍ヒサルモノアリト雖モ茲ニ敢テ之ヲ重ヌル所以ノモノハ実ニ本次聖戦ノ意義ヲ全タカラシメ又以テ大元帥陛下ノ御期待ニ副ヒ奉ラントスルニ外ナラス

諸士深く思ヒヨ此処ニ致シ将来ノ行動ニ萬遺憾ナキヲ期スヘシ

古人曰ヘク「勝ツテ兜ノ緒ヲ締メヨ」ト油断コソ我等ノ大敵タリ將兵一同益々自重相互戒メ愈々報効ノ誠ヲ致サンコトヲ期セヨ

昭和八年三月六日

第八師団長 陸軍中将 西 義 一

第八師団長西義一は満州事変の意義を「長城万里ノ墻壁ヲ確保シテ満州国擾乱ノ禍根ヲ絶ツ」ものと強調し、さらに熱河省を「安住ノ樂土タラシムルコト」を訓示して、その上、満州事変を「聖戦」の戦争であると歴史的意義を強調した。

川原挺進隊と自動車隊（第一，第三）は万里の長城を目がけて出発し、長山峪付近で兵匪と激烈な戦闘を続け、3月9日夕に退却させた。このため、自動車隊と川原挺進隊は追撃戦を開始し、遂に古北口に達した。この古北口の敵陣地を3日間の激戦の末、やっと占領したので自動車隊は、今度は軍需品の輸送に従事した。

川原挺進隊の隷下に入った自動車部隊の隊長である輜重兵中佐落合忠吉は「熱河作戦における自動車隊の活動」についてその困難な、そして厳しい自然条件の中での必死な自動車操縦について次のように述べている。

「熱河作戦における自動車隊の活動

輜重兵中佐 落 合 忠 吉

熱河作戦と言う言葉を聞くと同時に、誰しも直ちに連想致しますものは、彼の重畳せる峨々たる山岳地帯と、吹き溜りの砂深き砂漠地帯と、そうして鉄道と言うものの全然ない、交通極めて不便な土地であると言うことであります。

この不便な土地に於て神速な作戦を行うためには、自動車に対して軍が如何に大きな期待を以て望んでいたかと言うことが、ご想像になれると思います。また、それだけ我々の責任も重く、口では強

がりを言い、士気の鼓舞に力めていても、内心は種々の不安に駆られ、愈々成功の曙光を見るまでは安眠もできなかったのです。

討伐準備期間には、色々な情報が入って参ります。例えば、熱河の砂地は六輪車でも通過は見込みないとか、岩石を以て満たされた山道は到底自動車を通ぜずとか、陰気でもないことばかり教えて呉れる人が多く、甚だしきに至っては、大興安嶺の戦闘における札蘭屯の退路遮断や、東部国境、虎林方面における李杜軍追撃の成功にのぼせ上って調子に乗って行くと、今度はひどい目に会うぞなどと、おどかして呉れる御方もありました。

私は主力を率いて川原挺進隊の輸送に任じました関係上、主として此方面の状況に就て申し述べようと思います。

三月一日、朝陽を出発し途中三回の激戦を交え、万余の敵の大縦隊を悉く蹴散らし踏みにじりつつ一百里の峻険な道路を僅かに三日半にて突破し、熱河の首都承德を陥れ敵をして啞然たらしめました。

これ挺進隊長の神速果敢、挺進将兵の勇猛に依るのは勿論であります、延々長蛇の如き大自動車隊が一条乱れず、恰も一本の棒を動かす如く果敢に突進することに依って初めて為し遂げられたものであると信じます。今回の自動車追撃戦は、その快速と規模の大きい点と成果の偉大な点とに於て、戦史を飾る空前の壮挙であると信じます。

三月一日午前五時朝陽出発、と言えは何でもないようですが、あの狭い町に数千の支那馬車や軍隊が集まっている中で幾百の自動車を並べ軍隊を載せて、真つ暗闇の五時に出発する骨折りは並大抵じゃない。

兵は殆んど夜通し準備にかかって眠っておりません。この辺が第三者に想像のつかない苦しいところで、他隊の人あたり、五時出発と言え三時か四時頃起きて準備したのだぐらいに思っておられるが、仲々そう言う訳には行かない。初顔合せの各種の軍隊や器材を数百の自動車に乗せるためには、その準備や区分に非常な苦心と混乱とを来たすものであります。殊に前記のように、真つ暗な中に於て特に然りであります。

三月一日朝陽出発以来二五日、その走行実に二千五百軒、一日平均百軒を超え、将にこれ長期間連続行動のレコードであります。

満州では自動車は動かないという観念は、我々の過去一年半の行動に照し是非一掃しなければならぬと思います（昭和八年三月二十六日 於奉天）。

（注）三月二十六日、奉天とあるのは、増設四コ中隊掌握のため帰還したものと思われる。」

（前掲書 71-72 頁）

他方、綏中方面からは混成第十四旅団が万里の長城である喜峰口を目ざして前進し始めたが、その米山先遣隊は3月4日凌源—冷口を目ざして突進した。3月9日には米山先遣隊は喜峰口第一関門前に達し、またたくまに占領した。混成十四旅団自動車班と第四中隊とは混成十四旅団の輸送業務に従事し、前進を支えた。

熱河作戦を成功に導いた要因の一つに装甲自動車の活躍があった。既に、装甲自動車の利用はシベリア出兵と山東出兵の際になされていたが、この熱河作戦では3台採用され、第一～第三中隊において配置されていた。前に掲げた図表-2のちよだQ型装甲自動車が熱河作戦を成功に導いた推進力になったのでその活躍を次に明らかにする。

A 承德攻撃

この装甲自動車は川原挺進隊の最先頭を走り、搜索、警戒、戦闘に活躍した。3月1日に装甲自動車は平安地と葉柏樹の敵陣地とを突破し、川原挺進隊を前進させた。次いで装甲自動車

は歩兵第十七連隊の先頭を走り、3月2日凌源の敵兵に対し尖兵の戦闘突破に貢献した。3月3日平泉の占領に大活躍した装甲自動車は尖兵の役割を果たし、三叉口西方、さらに天朝山の敵陣地を突破して承徳の占領に貢献した。

B 承徳から古北口へ

3月6日に装甲自動車は戦車隊長百武大尉の隷下に入り、長山峪付近の戦闘で敵陣を突破し、3月11日には古北口北門と潮河右岸の敵陣を破壊したが、12日北門から古北口に突進して古北口を占領した。

C 平泉—凌源間の警備

8年7月から装甲自動車は平泉に、また、7月9日から凌源へ移動し、警備に就き、匪賊討伐に従事して成果を挙げた。

尚、百武戦車隊の隷下に入っていた装甲自動車2台は長山峪での戦闘において大破したが、修理によって前線に復帰した。

4 満州事変における河北境界方面作戦

(一) 河北境界方面南部地域の作戦—歩兵第十六旅団と装甲自動車の行動

熱河作戦が熱河省の省都承徳を占領することで、東三省の全てを関東軍の支配下に編入することで満州事変の作戦目標を成し遂げたが、関東軍はさらに一步踏み込んで北支那を占領する前線基地として河北境界方面の占領を作戦目標に掲げ、ここに河北境界方面作戦の実行に乗り出した。この河北境界方面作戦は「万里の長城の関門を確保」することに置かれていた。この万里の長城は(1)満州の独立を安全地帯にする国防上の境界となり、と同時に、(2)北京を含む北支那を占領する前線基地として機能することに期待を寄せていた。この河北境界方面作戦の推進力となったのは装甲自動車と尖兵自動車隊であるが、この点について自動車部隊第三中隊長今村国重は次のようにその活躍を語った。

「長山峪方面自動車尖兵分隊の行動

第三中隊 今村国重

昭和八年三月四日、承徳を占領した第八師団は、関東軍司令官から、「万里の長城の関門を確保」すべき命を受け、三月七日、歩兵第十六旅団(17i, 32i)をもって承徳を出発、同地西方約四〇軒長山峪、黄土嶺一带の山地に陣地を構築し、地雷を敷設、山砲、迫撃砲を持った有力な中国軍(王以哲軍約五千)を攻撃して激戦となり、戦闘は夜に入る。

歩兵第三十二連隊本部は、敵の夜襲を受けて一時後退を余儀なくされる苦戦となったので、旅団は夜間を利用して逐次兵力を増強するに決し、関東軍野戦自動車隊は承徳から長山峪への歩兵部隊輸送に当たったが、この頃、敵の迫撃砲弾は盛んに自動車部隊付近にも落下し、戦闘の進展は歩兵独力の攻撃だけでは困難となった。

当時野砲連隊は、承徳東方の天朝山の峻険な難所の通過に長時間を費やし、長山峪への進出が遅滞していたが、三月九日、漸く戦場に到着して戦闘に加入し猛烈な砲撃を加え、その援護下に歩兵部隊は攻撃前進したので、攻撃は大いに進捗し、敵主力後退の兆を見せた。折しも陽は西に没し、長山峪の山々は暮色に包まれていった。

ここにおいて、師団は直ちに追撃準備を開始した。この追撃戦における自動車隊第三中隊長中宮大尉の尖兵分隊に対する命令の要旨は次の通りであった。

- 一、敵主力は古北口方面に退却中。
- 二、師団は現在地付近に集結し、自動車部隊に搭乗して追撃を実施するに決す。
- 三、左記人車は尖兵として戦車隊長百武大尉の指揮に入るべし。

愛国号装甲自動車（操縦手原田栄一）

第二分隊より今村分隊長以下六名、貨車三両

四、尖兵の乗車区分

(1) 愛国号装甲自動車一戦車隊長百武大尉以下隊員乗車

(2) 今村分隊一配属工兵隊員乗車

(注) 一、戦車隊の戦車は、当時機関部に砲弾を受けて全車故障し、使用不能の状態であった。

二、愛国号は、前部に軽機一、砲塔に軽機二を装備していた。

さて、尖兵は直に出発したが、暗夜の道路には、中国軍により岩石を積み重ねた阻絶が至る所に設けられ、又地雷を敷設した箇所もあり、尖兵車搭乗の工兵隊は、これらの障碍排除に活躍したが、山頂から敵の銃撃を受けて意の如くならず、装甲車の援護射撃により弾雨を潜って排除作業を敢行し、前進に全力を傾注し、自動車も無灯火行進下、助手の誘導で弾雨の中を前進した。

尖兵は朝来の戦闘により、疲労困憊その極に達していたが、引き続き障碍を排除しつつ前進を続行、黄土嶺と思われる付近で退却中の敵に追及した。この頃、装甲車は車両整備のため少し後方に離れており、尖兵車両が最先頭に立って前進する状態であった。

暫く前進し、沿道の高地から部落内を偵察すると、道路の両側に民家が並び、街路樹が整然として見え、人の気配は全然ないので、分隊は部落内に進入した。民家は全部戸を締め、犬一匹いない。一本道路を通り、人家を離れて両側に街路樹のある道を左折した途端、退却中の敵乗馬部隊の後尾に車両が追突しそうになった。数百騎の敵は吃驚仰天、くもの子を散らすように逃げ出した。

咄嗟に尖兵分隊長の私は、車上の工兵に「敵だ」と怒鳴ったが、工兵隊員は昨夜一睡もしていないので全員眠っており、目を醒まして車から飛び降り、散開して射撃を開始した。敵の逃げるのは実に早く、肝を潰した模様だった。

尖兵の射撃開始の銃声を聞き、装甲自動車も疾走して来たので勇氣百倍、敵に大打撃を与え、死傷者多数であったが、わが方には損害はなかった。

道案内の満人に逃げられては大変と探したところ、車の下でブルブル震えて腰を抜き、全然立ち上がることが出来ないのを、兵隊達は「初めて腰抜けを見た」と大笑いだった。

この頃、本隊の前進は遅れていたもので、尖兵長は、本隊と余り離れないよう留意しながら、装甲車を先頭にして再び追撃に移り、敵を追ひ散らした。乗馬が銃弾に倒れ、徒歩で逃げる敵兵を、戦車隊長百武大尉は装甲車から降りて斬りまくる中に、敵兵は逃げ失せ、尖兵車は何時の間にか広い川原に出た。

フト前方を見た瞬間、万里の長城の敵陣地から猛烈な砲撃を受けた。この砲撃は、追撃隊の主力（自動車搭乗部隊）が後方の高地鞍部に姿を現わしたからであった。

わが軍主力は、天險の要塞、古北口の堅陣ハート型複郭陣地に拠り、我を迎撃しようとする敵宋哲元軍との間に、いよいよ戦端が開始された。

尖兵は、敵の砲撃により前進も後退も出来なくなって立ち往生し、敵弾を避けるため左側の山の絶壁（山の上には敵兵あり）の死角を利用して待避、本隊の到着を待った。暫くして、友軍の砲撃開始と共に歩兵部隊の攻撃前進となり、尖兵は危機を脱した。

そこで今村尖兵分隊は、本隊が到着し戦闘に移ったので、任務を終了、百武戦車隊長の指揮を解かれ、その任を完うして中隊に復帰した。

尚、わが第三中隊の愛国号装甲車は、引き続き戦車隊長と共に行動し、三月十二日古北口の攻撃に参加し、歩兵部隊の先頭に立って敵陣に突入し、偉勲をたて、後日論功行賞に際し、原田操縦手は武功拔群により功七級に叙せられ、金鷄勲賞を授与せられたと伝え聞いている。」

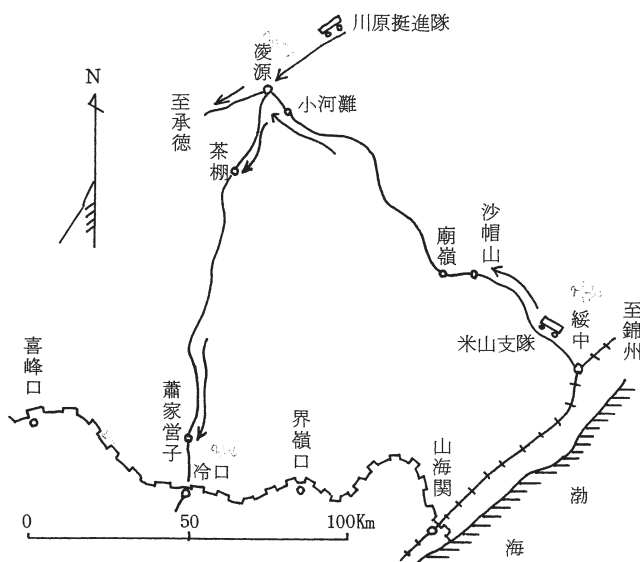
(前掲書 74-76 頁)

装甲自動車と尖兵自動車隊が前進の推進力となって、歩兵第十六旅団は3月7日承德を出発し、万里の長城の古北口を目ざして前進した。古北口へのルートでは険しい山岳地帯の天朝山を経て長山峪を越えたところで攻撃を受けた。が、装甲自動車の突撃の威力の前に敵が後退したため、味方の歩兵部隊は追撃戦に移った。万里の長城古北口に着くや、敵将宋哲元軍の攻撃に遭遇したが、味方歩兵による砲撃前進で、3月12日には古北口敵陣地を占領した。かくて、装甲自動車はこの戦いで偉勲をたて、勝利を持たらす原動力となった。

(二) 河北境界方面中央地域の作戦—川原挺進隊米山支隊と自動車第四中隊の行動

一方、川原挺進隊米山支隊は新設された関東軍自動車部隊第四中隊を隷下に置き、昭和8年2月26日次の図表-13に示されるように綏中を出てから沙帽山—凌源—茶棚—冷口のルートを通して河北境界方面作戦の達成に務めた。

図表-13 川原挺進隊米山支隊の行動ルート



(前掲書 77 頁)

3月4日には米山支隊は100両余りの自動車を動員して350軒を7日間で走破し、途中交戦12回に及んで戦死2名、負傷1名を出して36両の被弾を受けたが、前進を続けた。

なお、混成第十四旅団の編成自動車隊は(1)同旅団徴用自動車20両借上自動車小隊、(2)混成第十四旅団自動車班、(3)第四中隊とから成る次のような関東軍増設自動車隊の構成となった。

(1)混成第十四旅団借上自動車小隊

中隊長 山崎常二大尉（少2期）

第一小隊長 山本佐一特務曹長 } 小隊は二分隊
第二小隊長 安達賢市特務曹長 }

人員九四名，乗一，側一，貨五五

また，第四中隊と行動を共にした本部及び材料廠の一部は次の通り。

本部—新庄 淳少佐（25期），徳沢軍械大尉（27期）

人員一七名，乗二，側一，貨一

材料廠—班長中村勇電工長以下三名

(2)関東軍増加自動車隊

本部

長 新庄 淳少佐 副官 徳沢軍械大尉

第四中隊

(3)混成第十四旅団自動車班

長 桜井幸衛大尉（33期）

第一小隊長 窪田曹長—三分隊

第二小隊長 玉木中尉—五分隊（借上）

修理班

人員七五名，乗二，側一，貨四二

以上計 人員一九〇名，乗五，側二，貨九八

関東軍自動車第四中隊の分隊長野村利雄伍長の活躍に対し関東軍司令官武藤信義は次の感状を授けた。

「 感 状

関東軍自動車隊第二中隊

陸軍輜重兵伍長 野 村 利 雄

右者昭和六年末関東軍第二野戦自動車隊ノ一員トシテ渡満以來或ハ錦州，哈爾賓，方正等ノ攻撃ニ或ハ黒龍江省，東辺道，吉林省東境方面ノ討伐ニ或ハ大興安嶺ノ作戦等ニ参加シテ屢々武勲アリ

昭和八年二月熱河作戦ノ開始セラルルヤ当時伍長ハ上等兵ナリシカ選ハレテ分隊長トナリ臨機編成セラレタル自動車第四中隊ニ属シ混成第十四旅団ノ兵力輸送ニ任ス 二月二十六日勇躍綏中ヲ出発率先難ニ赴キ克ク部下ヲ鼓舞指揮シテ遺憾ナク自動車隊ノ能力ヲ發揮シ乗車部隊ヲシテ機ニ投シ戦場ニ到着スルヲ得セシメタリ 殊ニ三月二日凌源ニ向フ追撃戦ニ当リ新ニ尖兵トナリシ歩兵第二十八連隊第五中隊ヲ搭載シ先頭ニアリテ前進シ三河東方大凌河橋梁ノ焼却セラレツアルヲ見ルヤ彈丸雨飛ノ間沈着克ク渡河点ヲ偵知シテ進路ヲ求メ又小河灘付近ニ於テ凹道ヲ阻絶シアルニ会スルヤ単身敵ノ十字火ヲ犯シ阻絶ノ岩石ヲ排除シテ進路ヲ開キ尖兵ヲシテ神速ニ凌源ニ進入スルヲ得セシメタリ

前述ノ如ク伍長カ阻絶ヲ排除シテ再ヒ乗車セントスル殺那不幸敵彈ニ斃レシト雖モ其ノ沈着勇敢終始一貫セル犠牲的精神ノ發揮ト機宜ニ適セル行動トニ依リ凌源占領ニ寄与セル功績ハ拔群ニシテ是軍ノ範トスルニ足ル

仍テ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和八年三月四日

関東軍司令官 武 藤 信 義

（注） 実際の授与日は十一月十六日であった。」

自動車第四中隊の野村利雄伍長が「凌源占領ニ寄与セル功績」に対する感状を受けたが、一方、次の「賞詞」は凌源より冷口に到る中で東北正規軍との激戦に勝利して冷口を占領した功績に対して混成第十四旅団長服部兵次郎から与えられたものである。この賞詞は参戦した自動車部隊が万里の長城の山嶺重壘と真冬の「酷寒肌ヲ刺」す中、「不眠不休」の急進をし、途中で「敵ヲ席捲」しながら前進し、「徹底的打撃ヲ与へ三月四日逐ニ関東軍ノ先驅トシテ冷口関門ニ突入シ之ヲ確實ニ占領セシメタ」る功績に対して与えられ、次の如く河北境界方面作戦の戦略と戦術とを明らかにしていた。

「 賞 詞

混成第十四旅団米山先遣隊協力自動車隊
自動車隊長 陸軍少佐 新 庄 淳
関東軍自動車隊本部及材料廠ノ一部
関東軍自動車隊第四中隊
混成第十四旅団自動車班
混成第十四旅団借上自動車小隊

右ハ熱河作戦初頭混成第十四旅団米山先遣隊ニ協力シ沙帽山、野雞溝及凌源ノ敵陣地ヲ撃破シテ長城冷口関門ヲ占領スル目的ヲ以テ昭和八年二月二十六日同支隊ヲ搭載シテ綏中ヲ出發セリ 進路タル綏中—凌源—冷口道ハ崎嶇タル山嶺重壘シ大凌河ヲ初メ大小幾多解氷初期ノ河川処々ニ横ハリ路幅狭小未タ自動車ヲ通シタルコトナキ至難且危険ナル地形ニシテ加之酷寒肌ヲ刺シ屢々敵ノ彈雨ヲ蒙リタルニ関ラス將兵ノ志氣愈々旺盛ニシテ不眠不休之等ヲ克服シ疾風枯葉ヲ捲クカ如ク急進ヲ繼續シ米山先遣支隊ヲシテ途中堅壘ニ拠リ頑強ニ抵抗セル優勢ナル東北正規軍ヲ随所ニ迅速ニ撃破セシメタリ 即チ二月二十八日より三月一日ニ亘リテハ沙帽山、野雞溝及廟嶺付近ノ最モ堅固ナル既設陣地ニ占拠シ執拗ニ抵抗セル約三千ノ敵ヲ撃破シ磨石塘嶺ノ天險ニ拠リ敵収容陣地ヲ突破シ更ニ自動車追撃ニ依リ北章營子南方地区ニ於テ約二千ノ退却中ノ敵大縦隊ニ追迫シ多大ノ損害ヲ与ヘテ潰乱ニ陥ラシメ次テ彈雨ノ間ヲ快速ヲ利用シテ穿貫シテ急追ヲ続行シ三月二日吟叭嶺付近ニ於テ陣地ヲ占領セル約五百ノ敵ヲ一蹴シテ危険ヲ顧ミズ凌源ニ急泊シ東方ヨリ前進セル川原挺進隊ト相呼応シテ約七、八千ノ敵ヲ四散セシメ第一ノ戰略目標タル凌源ヲ占領セリ

野雞溝ノ陣地攻撃ヨリ凌源占領迄ノ戦鬪ニ於テ当自動車隊ハ常ニ敵彈ヲ冒シテ奮進シ小隊長、分隊長及運転手相次テ敵彈ニ斃レ自動車ニシテ敵彈ヲ受ケタルモノ数十両ニ及ヘリ

然ルニ攻撃精神ハ益々旺盛ニ団結ハ愈々鞏固トナリ凌源ヨリ更ニ南転シテ途中小数ノ敵ヲ撃破シツツ急追又急迫三日魚鱗山付近ニ於テ約一千三百ノ敵ヲ駆逐シ拉々嶺、車廠嶺、駱駝嶺等ノ難関ヲ越ヘツツ退却中ノ敵ヲ蹂躪シ続テ三門店付近ヨリ冷口ニ至ル間約二千ノ敵ヲ席捲シ路上敵ノ遺棄セル屍体、火炮、彈藥、糧秣等累々トシテ路上ヲ掩ヒ敵ニ徹底的打撃ヲ与ヘ三月四日逐ニ関東軍ノ先驅トシテ冷口関門ニ突入シ之ヲ確實ニ占領セシメタリ

斯ノ如ク行程約三百五十軒 險阻ナル未知ノ敵地ヲ幾度カ激戦ヲ交ヘツツ電火石火的に猛烈果敢ニ突破シ敵ヲシテ対応スル遑ナカラシメ米山先遣支隊ヲシテ広ナル地域ニ亘リ最短期間に拾数倍ノ敵ニ対シ連戦連捷赫々タル武勲ヲ樹テシメタリ

以上ハ指揮官以下將兵各々克ク和衷協同積極の二其ノ任務ニ邁進シ旺盛ナル攻撃精神ト不屈不撓ノ決死的奮闘トニヨリ自動車隊ノ能力ヲ最高度ニ發揮シ戦史ニ稀ナル驚異の偉大ナル成果ヲ挙げタルモノニシテ皇軍ノ威武ヲ中外ニ宣揚シタルモノト認ム

依テ茲ニ之ヲ賞ス

昭和八年三月十日

混成第十四旅団長 服 部 兵次郎」

（前掲書 77-78 頁）

（三）河北境界方面北部地域作戦―第六師団と第二中隊

8 年 2 月 23 日、第六師団は関東軍自動車第二中隊と騎兵旅団を隷下に置いて彰武を出発し、通遼―赤峰―囲城を目ざして前進した。

この第六師団は(1)右縦隊先遣隊池田大隊、(2)中央縦隊、(3)騎兵旅団、そして(4)自動車第二中隊を編成し、囲城占領を目ざして出発した。一方、左縦隊は鉄道輸送で錦州に到着し、2 月 25 日第八師団先遣隊と協同して朝陽を攻撃して占領した。

北部の第六師団は赤峰から囲城へ目ざし、一方の左縦隊は錦州から中央の朝陽を経て北部の赤峰へ突進した。北部ルートの騎兵集団は、孫殿英軍を撃破して 3 月 2 日に赤峰を占領した。第六師団は囲城を占領し、以後熱河省北部方面河北地域の警備に従事した。

また、北部ルートを前進する騎兵集団は孫殿英軍と激戦し、3 月 2 日に赤峰城を掃蕩した。一方、右縦隊の隷下にあった自動車第二中隊は池田大隊を下窪迄自動車輸送し、それから赤峰迄歩兵第二十三連隊先遣隊の輸送を敵中突破しながら遂行した。

なお、自動車第二中隊が先遣隊池田大隊を乗せ、快速先遣隊となって通遼―太田公司―赤峰地へ前進すると、張学良軍、孫殿英軍と激戦を繰り返し、辺牆山に突進した。こうした自動車第二中隊の河北方面北部ルートでの砂漠地帯、山岳地帯と敵陣の中を突破することについて第二中隊小隊長城戸正中尉は次のように回顧した。

「第二中隊行動の思い出

第二中隊 城 戸 正

わが第二中隊は、第六師団右縦隊の先遣隊である池田大隊（歩兵約一コ大隊、連隊砲一コ小隊基幹）を搭載して快速部隊となり、二月下旬通遼を出発、敵の抵抗を排除しつつ前進したが、出発第一日の夕刻から優勢な敵部隊に遭遇したので、旅団長高田少将は、部隊を太田公司の部落内に集結して夜を徹することに決した。部隊は厳重な警戒の下に部落の囲壁に銃眼を作り、敵の夜襲に備えて待機した。

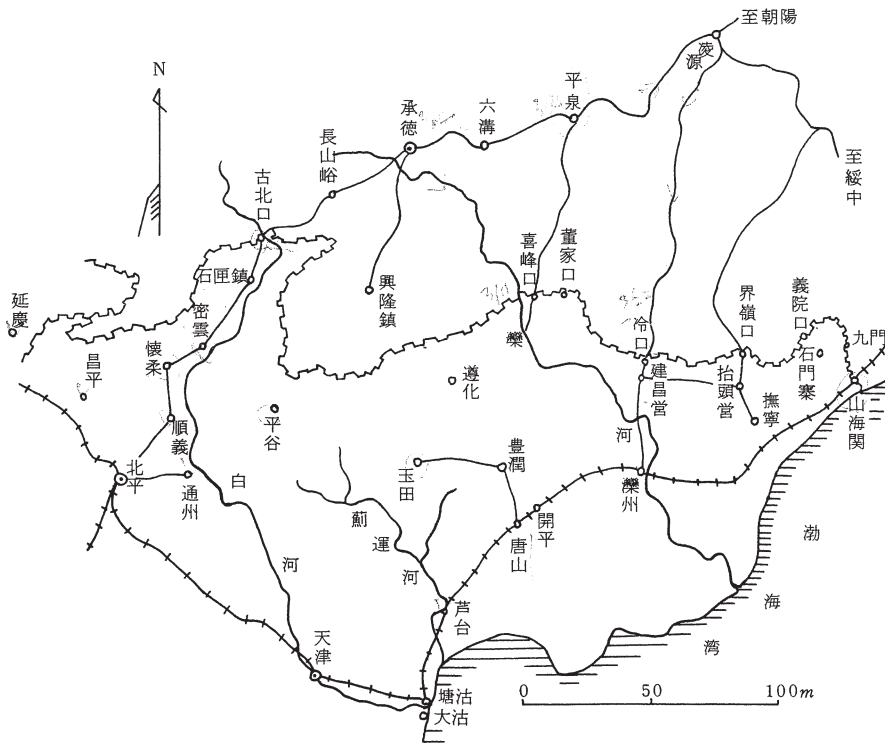
敵は日本軍を劣勢と侮り、夜に入るとラッパを吹き喚声をあげて、わが宿営地に向って数回の突撃を敢行して来たが、わが部隊は少しも騒がず、照明弾を打ち揚げ、その明りを利用して銃眼から敵を狙撃したので、敵は多数の屍体を遺棄して翌未明総退却した。

先遣隊は、機を失せず自動車の機動力を利用して敗走する敵を急追した。途中下窪付近の湿地帯では多少時間を費したが、歩兵の協力により無事悪路を乗り越え、白塔子、建昌営子を経て、その夕刻には赤峰を占領することができた。

翌朝、さらに敵を求めて西南進し、午後二時頃、朝陽地（赤峰西南方約八〇軒）付近に達した時、突然左前方の部落、続いて前方の部落から急射撃を受けた。当時、部隊の最先頭を前進した私は、地形地物を利用して自動車を遮蔽する暇もなく、直ちに停車を命じて歩兵尖兵を下車させた後、付近の地形を利用して自動車を遮蔽、待機させ、歩兵部隊の攻撃を援助した。

後で判明したのであるが、当面の敵は、張学良の正規軍、孫殿英の指揮する約一コ師で、今迄の敵とは違い、装備も良く仲々頑強に抵抗したので、攻撃部隊も一時苦戦に陥ったが、夜に入り歩兵部隊

図表-14 関内作戦ルート



(前掲書 80 頁)

が勇敢に敵陣地に突入し、漸く当面の敵を撃退することができた。

この戦闘で、先頭の自動車三両は蜂の巣のように敵弾を被って行動不能となったが、徹夜で修理し、翌朝迄に漸く修理を終った。

その後は大した敵の抵抗もなく、尖兵は自動貨車の台上から軽機を發射しつつ前進したが、辺牆山(承德北方約百軒)付近に進出後、師団命令によって赤峰に帰還した。

この作戦において、中隊は機械化部隊としての能力を遺憾なく發揮し、その敏速適切な行動によって師団の作戦を有利に導いたので、第六師団長より表彰状を受け、大いに中隊の面目を施したのであった。」

(前掲書 79-80 頁)

(四) 河北境界方面灤東地域作戦—第八師団と関東軍自動車部隊

河北境界方面長城付近を占領した関東軍は、さらに北支那への関内地域を獲保する命令を第八師団に下した。というのも、この関内地域を占領することは二重の意義を有しているからである。第一点はこの関内地区を緩衝地帯にすることで東三省(満州)の独立を維持することが出来る点である。第二点はこの関内を前線基地にして北支那への侵出を可能にされている点である。こうした満州事変の戦争勝利とその将来性は、次の3点に要約される。第一は北支事変を勃発させて将来の大東亜戦争を必然化しようとする点である。他方、第二は援蔣ルート

撃を通して天津—香港—サイゴン—ビルマ—インドへ進出し、その前進する武力行使でイギリス、アメリカ等との太平洋戦争へ結びつけようとする点である。第三は日米交渉を巡って交渉破談の原因となったのがハル・ノートによる支那、満州からの日本軍撤退要求であり、満州事変の成果を否定しようとする点に置かれていたことである。特に、第三の満州事変の否定は日本の生命線を切断することを意味し、陸軍そのものの生命を断つこととなる。ここに東条英機の太平洋戦争への決意が込められることになるのである。

関東軍の関内作戦は北京に近接する密雲—懷柔—順義—通州の北方ルートと山海関—灤州—開平—芦台—塘沽の南方ルートを占領することであり、次の図表-14に示される。

関東軍司令官は、(1)第八師団、(2)第六師団（自動車第二、第六、第七中隊）、(3)第十四師団の歩兵第二十八旅団、(4)混成第三十三旅団、(5)混成十四旅団、(6)第六師団の歩兵一連隊（迎支隊）、(7)関東軍自動車部隊（第一、第三、第四、第五、第六、（以下新設）第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三の計11コ中隊）等に関内作戦の実施を命じた。以上の軍隊と自動車部隊の大動員は関東軍を関東州と満鉄沿線国境警備隊の地方軍隊から中央軍隊の一角を占めるほどに成長したことを意味するようになり、かくて満州、北支の作戦と戦術を独自に実施する軍閥に発達するのであった。既に帝国の内閣、陸軍省及び参謀本部と肩を並べるほどに成長した関東軍は帝国の生命線としての重みを満州において増大させた。関東軍は昭和8年3月2日に混成第三十三旅団を冷口以東の関門警護に当らせた。また、混成第十四旅団は喜峰口の守備に就いたが、敵襲を受け、第八師団の増援で守りぬいた。さらに第八師団は第三十三旅団に冷口関門の占領とその維持を命じた。

かくて、冷口関門を巡る勝利が一つの争点となり、第六師団と第八師団はこの灤河東岸地区の攻防に全力を注ぎ、3月から4月にかけて激戦を繰り返した。しかし、敵の正規軍を撃破した第八師団は古北口の占領に向かった。一方、中央ルートの北票—古北口間の長距離にわたっての軍需品輸送は輜重兵中佐落合忠吉自動車隊長が11コ中隊を指揮して長大な兵站線輸送に全力を注ぎ、各所の戦線を支えた。一方、第二、第七中隊も第六師団に入って山海関—建昌営間の軍需品輸送に従事した。

（五）河北境界方面関内地域の占領と塘沽協定

関東軍は前述したように万里の長城を中心とする灤東地域を占領した後、図表-14に示されるルートで北支に隣接する関内地域への出撃命令を5月3日に下した。一部軍の編成替えが行なわれ、第六師団は混成第十四旅団を隷下に置いた。第十四師団は歩兵第二十八旅団司令部を加えた。

5月23日には、各師団と旅団が古北口—密雲—懷柔—平谷—薊運河へ、又、唐山—豊潤—玉田へにも進出し、ほとんど関内地域を占領し尽そうとしていた。さらに、関東軍は塘古—天津—北京への侵出を目ざして前進し始めたが、ここで蒋介石は停戦を提議した。その結果、塘沽協定は5月31日に締結された。この協定は(1)関内地域を緩衝地帯と位置づけ、満州を中国

から分離した。この満州の独立を地理的に確保するため、支那軍の北側に位置する延慶—昌平—順義—通州—香河—芦台の線を超えないこと、(2)また一切の挑発、匪兵行為を行なわないことを約束させる内容となった。

しかし、関東軍の石原莞爾中将はこの塘古協定の不備から次の北支事変への勃発を次のように予言した。

「塘沽停戦協定によって、日支全面戦争に至らずに、局地解決に導きえたことは一応の成功であった。しかし、さらに外交交渉を進めて、蒋介石をして排日停止、共同防共、満州国承認、少なくとも黙認まで約させるべきであった。満州事変の終末指導をいいかげんにしたことは、将来支那事変にまで進展させた一つの素因であった」と。

(前掲書 82 頁)